

学生とともにすすめる FD

シンポジスト

木野 茂 （立命館大学 共通教育推進機構 教授）

梅村 修 （追手門学院大学 教育研究所 所長）

村山 孝道 （京都文教大学 教務課 係長 FD委員会委員、FSDプロジェクトメンバー）

山内 尚子 （京都産業大学 学長室）

立命館大学 学生 FDスタッフ

追手門学院大学 学生FDスタッフ

京都文教大学 FSDプロジェクトメンバー

京都産業大学 学生 FDスタッフ

コーディネーター

耳野 健二 （京都産業大学 法学部 教授・学長特命補佐）

＜シンポジウム②＞

学生とともにすすめる FD

参 加 人 数	259 名
シンポジスト	
第 1 報 告 者	木野 茂 （立命館大学 共通教育推進機構 教授）
第 2 報 告 者	梅村 修 （追手門学院大学 教育研究所 所長）
第 3 報 告 者	村山 孝道 （京都文教大学 教務課 係長 FD委員会委員、FSDプロジェクトメンバー）
第 4 報 告 者	山内 尚子 （京都産業大学 学長室）
	立命館大学 学生 FD スタッフ
	追手門学院大学 学生 FD スタッフ
	京都文教大学 FSD プロジェクトメンバー
	京都産業大学 学生 FD スタッフ
コーディネーター	耳野 健二 （京都産業大学 法学部 教授・学長特命補佐）

耳野 皆さんこんにちは。只今ご紹介に預かりました京都産業大学の耳野でございます。今回の第 18 回 FD フォーラム「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには」におきまして、シンポジウム②「学生と共に進める FD」のコーディネーターを務めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。ここでは、当シンポジウムの趣旨の説明とプログラムについてご案内を申し上げます。

まず、プログラムの趣旨について。昨年、文部科学省の答申も出まして、学生の主体的な学修を確保しつつ高等教育の質的転換をはかる、ということが盛んに言われるようになっております。その一方で、FD の世界でも学生とともに FD を推進するという気運がずいぶん広まっておりまして、FD の重要な一分野として確立してきております。そこで今回は、全国の大学教職員に皆さんに、こうした学生 FD に携わっている学生たちと直接触れ合っただき、学生 FD がどういうものか、そして学生 FD の魅力とはどのようなものか、これを是非ご自身の目で確かめていただきたいと思います、プログラムを作成いたしました。

次にプログラムの内容を申し上げます。まずこの後すぐ、立命館大学共通教育推進機構の教授でいらっしゃる木野先生に基調報告を頂戴します。これが終わりますと、学生 FD の活動について、四つの大学それぞれに報告を行っていただきます。その際、学生 FD を指導されておられる教職員の方と、実際に活動しておられる学生 FD スタッフの皆さんにご登壇いただきます。最初にご報告いただきますのが、立命館大学の学生 FD スタッフの皆さん。次いで、追手門学院大学教育研究所の所長でいらっしゃる梅村修先生ならびに学生スタッフの皆さん。続いて、京都文教大学教務課係長 FD 委員会委員、FSD プロジェクトメンバーでいらっしゃる村山孝道先生、ならびに京都文教大学の FSD プロジェク

トメンバーのみなさん。そして最後が、京都産業大学学長室の山内尚子先生と京都産業大学の学生 FD スタッフの皆さんです。

これが終わりますと、休憩をはさんで「しゃべり場」の時間へ移ります。ご参加いただいている教職員の皆さんには 10 のグループに分かれていただき、グループ毎に学生 FD スタッフとの交流を体験していただきます。各グループには、四大学の学生さんが少なくとも一名入ってくださいます。「しゃべり場」が終わりましたら、全員再び全体会場へお戻りいただき、各グループの様子をご報告いただき、全体で共有したいと考えております。

それでは早速基調報告から参りましょう。立命館大学の木野先生にご報告を頂きたいと存じます。木野先生よりお願い致します。

基調報告

木野 今ご紹介いただきましたように、このシンポジウム②の「学生とともに進める FD」での基調報告となっていますが、多分多くの方々は学生 FD についてそんなに詳しく知っておられないと思いますので、最初に少し学生 FD って何とか、今どういう状況になっているのかをご説明申し上げたいと思います。

学生 FD というのは、先ほど挨拶のところでも触れましたが、2009 年から始まった学生 FD サミットの開催を契機に広がったのですけれども、実はこの年は FD 義務化の翌年でして、学生 FD と広がりとならに因果関係はあると思いますので、ちょっとだけ頭に置いて頂ければと思います。

ところで「学生とともに進める FD」、一言で私は「学生 FD」と総称しておりますけれども、これを考えた最

初のきっかけは、「学生とともに作る授業」という授業の方のFDからです。今日のもう一つのシンポジウムのテーマに近い学生の「主体的な学び」を実現するような授業をどう作るかという取り組みです。この大学授業のパラダイム転換に向けて私も1994年から授業実践を含めて関わってきました。その中では、現在のアクティブラーニングにも見られるように、「学生とともに」という所をどう具体的に実践していくかということがポイントなのですね。

しかし、一般にFDということになると、教員が、職員が、あるいは大学の組織が行う教育改革の取り組みというスタイルで、学生はそのFDの受益者としての立場でしか考えられていなかったのです。そこで、発想を変えて、学生が主体的に教育や授業について考え、学生の視点から改革する動きができないものか、もしそういう動きが始まれば、教員、職員と三位一体でやるFDができるのではないかと考えたのがその発端です。これを私は二つ目のパラダイム転換と名付けておりますが、ここでのシンポジウムではこの二つ目のパラダイム転換についてお考え頂きたいと思います。

「学生FDとは？」という大げさなタイトルですが、言っていることは何の変哲も無く、学生の視点を活かすということです。こう言いますと、FDはもともと学生のためにやってきたのではと言われる方も多いかと思いますが、教職員の頭の中だけで学生の為に良かれと思ってやっていることが本当に学生の為になっているのかを一度お考えください。本当のところはやはり学生に聞かないと分からないと思います。そう意味で学生の視点をベースにしてというのが第一のキーワードで、そして教職員と一緒にやろうというのが「三位一体」という次のキーワードです。

では学生FDでは何をすればいいのかということになりますが、それは各大学の置かれている状況や専門性あるいは規模や設置形態などさまざまなわけですから、それらにあった最適な取り組みを模索するということで、すべての大学に通用するモデルがあるわけではありません。

学生FD活動の意義ということですが、一番大きいのは大学のFDに学生の視点を反映するということです。同時に、こういう学生自身のさまざまな活動というのは、そこに関わる学生自らの成長につながりますが、この学生FDでも全く同様です。

こういう学生がFDに関わるという動きは、実は2001年頃に岡山大学で学生参画型FDとして始められ、その他の国立大学の一部でも何年間か手がけられたことがあります。しかし、岡山大学以外のほとんどの大学では数年で途切れております。その後、2007年になって立命館大学の私どもの方で学生FDスタッフとい

うのを先ほどの発想を元に立ち上げました。そして学生主体の活動であると同時に、教、職、学の三位一体で学生FDというものができないかと活動を開始しました。これが第二期の始まりで、いわば学生主体型のFDと言うべきかなと思っております。

この第二期の学生FDを1大学の中だけでの取り組みとしてではなく、FDのパラダイム転換として全国に広げようという次のステップに至ったのは、たまたまですが山形大学と立命館大学の学生交流の機会があったためです。この二大学は規模も違いますし、地域も違いますし、国立と私学といった全く違う性格の大学ですが、その大学間での学生交流が新しい契機になって新しい展開を生み出したのです。

これは両学長の前で学生FDサミットの提案をしたときの写真(2008.12.20)です。他大学を知って自大学を知るということを大学間交流の中で学んだと、そしてお互いの大学の中に自分たち学生だけではなく、大学を良くしたいと思っている教職員もいるということを発見したと、これは学生にしてみれば極めて珍しい、奇妙な発見なのですね。そこで、2大学だけでなく全国の大学とつながることで更にFDを発展させたいと、これが発端となって学生FDサミットというのが立ち上がったのが2009年の夏です。

最初はいきなりですからはたして集まるのかなと思ったのですが、幸いにも26大学100名の方が参加されました。このときの学生たちのスローガンは「大学を変える 学生が変える」というキーワードで、これは今も引き継がれております。第1回で最も人気のあったテーマが「学生・教員・職員が協力して良い大学を作るには…」だったことからわかりますように、当初から学生たちは教員、職員と一緒にやることに非常に興味を示したようでございます。この後、半年に一回集まるサミットが継続しております。そしてうなぎ上りに参加大学も参加者数も伸びております。

2010年冬のサミットはまだ初めの頃ですから、「各大学でどんな学生FDができるか？」ということそれぞれ知恵を絞って出し合いました。3回目になりますと参加者も200名を超えました。テーマも本来の学生FDの根幹である「大学の教育の意義」となり、4回目では学生の視点から「どんな授業がいい?」「大学で何がしたい?」「課外活動って必要?」について考え、それぞれの具体的な課題も浮かび上がってきました。この4回目は2011年の夏ですが、この前の春に行うはずのサミットは飛んでおります。実は開催予定日の前日に3・11の東日本大震災がありまして、法政大学で行う予定だったのです。そこでもう一度、立命館から再出

ということで4回目を開催した次第です。さいわいに47大学271名にも上る参加者で学生FDが全国的に広がったことがだれの目にも明らかとなりました。

そこで5回目は何としても立命館以外でということをお願いした結果、追手門学院大学で開催していただくことができました。56大学340名とますます参加者数も多くなりましたが、このときには「あなたはどんな大学に通いたいですか?」という統一テーマで話し合われました。そして昨年夏の立命館大学で行ったのが6回目になります。このときは59大学427名にも達し、この会場以上の規模になりました。このサミットのときはちょうど先ほどの話にも出ていた中教審答申が出る直前で、「学生の主体的な学び」というキーワードはすでに知れ渡っていました。そこで、このサミットでは答申が出る前に学生にとっての主体的な学びとは何かを学生の視点から問い直そうということで行いました。

第7回はこの2週間後の、3月の5・6日に初めて国立の岡山大学で行われます。岡山大学でのテーマは「自大学により貢献する学生FD活動をするには」という、それぞれの大学のFD活動と学生FD活動をどうリンクさせ、どう大学に還元するかという新しい発想が加えられています。

こういう学生FDの動きがいま全国では、お手元の予稿集にも今日の配布資料の中にもありますけれども、60大学にも広がっております。もう何年もやっておられる大学から、最近始められた大学などさまざまでし、最近どうなったのかなと思う大学もあるにはあります。西高東低といわれた当初の状況と比べれば明らかに全国に広がっております。最近活発なのは北海道の地域と九州の関門地域です。もちろん学生FDの発端となった京滋地区と関西は今でも学生FDの拠点地域です。

学生FDに取り組む大学がこれだけ広がってきますと、同じ地域にいくつもの大学が取り組んでいることが分かります。そうすると半年に一回のサミットだけでなく、地域で横の繋がりができ、随時交流も行えるようになりました。岡山では以前中四国の交流が謳われていましたし、東北では山形大学が基幹校の「つばさ」で学生FD会議が行われていますし、関西では以前からいろいろな大学間の交流が続けられています。北海道では札幌大学を中心に054timeという学生FD交流会、関東地区では関東圏FD学生連絡会による学生フォーラムができています。先ほど言いました関門サミットもそうですね。

こういう地域での交流だけでなく、最近では2大学間、3大学間の大学間交流も活発になってきております。今日紹介していただく追手門学院大学と京都文教大学

の連携プロジェクト「学生FDのWA」はその典型です。立命は山形とから始めましたが、今後はよく似た大学同士でも交流を始めていきたいと思っています。

こういうふうに学生FDは全国に広がってきましたが、最初に学生FDとは何かという基本的な理解が一致していないと、それぞれ走る方向がどこへ行くのか分からなくなる可能性もなきにしもあらずと感じまして、去年の3月に『大学を変える 学生が変わる—学生FDガイドブック』という本を出しました。この中に学生FDとは何かを、今日お話しした内容をもう少し詳しく書いています。さらに具体的にどんなことができるのかを、当時活発だった7大学の実践例の紹介を収録しております。

さらに、さきほど紹介しました立命館以外で初めてサミットを開催していただいた追手門学院大学でのサミットの記録を梅村先生に第二巻としてまとめていただきました。もうすぐ出版されます。さらに昨年夏に行った立命、および二週間後に行う岡山のサミットの記録もまとめたと思っていますので、これからご関心を持つ先生方や職員の方々、学生の方々、ぜひ目を通して頂ければありがたいなと思います。

ということで、FDのパラダイム転換を目指して始めた学生FDのごく一端だけですけれども紹介させていただきました。つたない話ですが、ご清聴、ありがとうございます。

耳野 木野先生ありがとうございました。それではここからは4つの大学の学生FDの活動報告をお願いいたしますと思います。最初は立命館大学の皆さんです。よろしくお願い致します。

○学生FD活動報告

【立命館大学】

学生FDスタッフ：岩佐 皆さんこんにちは。私、立命館大学法学部2回生の岩佐香織と申します。こちらではまず昨年度の代表の澤野俊英から立命館大学の学生FDについて説明申し上げます。ただ澤野は本日所用があり、こちらには参加できない状況ですので、大変恐縮ではございますが録画にての報告とさせていただきます。申し訳ございません。

学生FDスタッフ：澤野 こんにちは。只今、ご紹介にあずかりました学生FDスタッフ2011年度代表を務めました澤野俊英と申します。私は先ほどの木野先生の説明でもあった第4回学生FDサミットに代表とし

て企画運営に携わりました。学生 FD サミットの企画運営を担う中で、プレゼンをする力であるとか企画する力などはもちろんの事、全国、北は北海道から南は九州まで沢山の方と協力し合うことなどで、本当に全国各地に信頼できる仲間ができたなど得る物は沢山あったのですが、特に私が代表の経験だとか1回生の時からの学生 FD 活動の中で得たもので魅力と思っているものは、自分の大学生活4年間をしっかりと考える事だと思っています。

大学の魅力や価値などというのは大学の入り口、どの大学に入学するか、もしくは出口、どこに就職するかなどで語られる事が多いのですが、それを語れる上で4年間どう過ごして来たかという部分がすごく大切になってきます。どんな企業でも、やはり大学生のうちにどういうことに力を入れたのか、必ずある設問ですよね。そういう意味でも自分の過ごす4年間をしっかりと考え直して、そして改善できるものは改善していこうというこの活動は自身にとっても、また他の学生にとっても良い活動ではないかなと思います。

そういう意味もあって、第7回学生 FD サミットの開催なども木野先生からご案内がありましたが、学生 FD サミットという分かり易いイベントを通して学生 FD がもっともっと広がって行けばいいのではと思っています。ただ、先ほどの木野先生のご紹介にもあったように、もともと100人だった人数が400人を超える様な大きなイベントとなっています。最初は学生 FD スタッフというような名で同じ様な活動をしていた全国の5大学くらいのところから始まったのですが、現在は50大学にも達し、そして学生 FD スタッフという団体だけではなく、自治会やTAなど、本当にたくさんのアクターが参加するイベントになってきました。そういういろいろな方が参加されるイベントの魅力をどう高めて行くか、どのようにして一人一人に満足して頂けるかなどを、課題は沢山ありますが、それをどのように解決しているか、そして今後の学生 FD サミットだけではなく学生 FD をどのようなものにして行きたいかという事については、後輩の岩佐と加藤の方から紹介してもらいたいと思います。

岩佐 それでは2012年度の立命館学生 FD スタッフの報告をさせていただきます。まず2012年度は前期に夏サミットを8月25・26日に開催し、学生・教職員を含めた400名以上の方に参加していただきました。

1日目の主なプログラムは、活動紹介ブースと分科会、2日目は、しゃべり場と発表を行いました。今年のサミットでは、分科会から、活動紹介ブース、しゃべり場など、これまでよりもプログラム数を増やし、初参加の方もサ

ミット経験者なども、それぞれのニーズにあった参加ができるようにしました。しかし、その反面、10人程度のスタッフですので、この三つのプログラムを準備するには大変な労力と時間がかかり、前期の活動はほとんど夏サミット準備で追われるという結果になってしまいました。

私たちの学生 FD スタッフの問題点としましては、スタッフの人数が少ないということに加えて、学生 FD への知名度が低い、スタッフ内の横のつながりが希薄といったことが上げられます。そこで後期は新しくプロジェクト制を作り、職員企画班、授業アンケート班、しゃべり場班、一ヶ月ごとに活動を報告する機関紙班、今話題の人にお話を伺うゲストスピーカー班、広報担当など、それぞれのプロジェクトにつき約3人が担当して様々な企画を行いました。

その中でも後期の主な企画として、職員企画の『あのころ君は若かったー学生と職員の対話の場』という企画を行いました。本企画は立命館大学の4名の職員を登壇者としたパネルディスカッションと職員を交えた参加者によるしゃべり場を通して、参加学生に立命館大学の魅力を再発見して頂き、学生に今後の大学生活を設計してもらおうというものです。当日は20名ほどの学生、一般職員3名が参加し、学生 FD スタッフを含め計25名の充実した企画となりました。

これで2012年度の活動報告を終わり、次にこれから2013年度の学生 FD をもっとよくするためにどうしたらいいのかを加藤からご説明を申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

学生 FD スタッフ：加藤 ご紹介に預かりました立命館大学学生 FD スタッフの来期の代表になります加藤雄一郎と申します。よろしくお願い致します。

私からは、先ほど岩佐から説明があったのですが、立命館大学学生 FD が抱える悩みをどのように解決したらいいのかということをごすね、来年の目標という形で発表させて頂きたいと思います。

最初に立命館大学学生 FD が抱えている悩みについて説明させて頂きたいと思います。一つ目が組織内での共通意識の欠如というのがありまして、2012年度は先ほどの説明にもありましたが沢山の企画を行ってまいりましたが、もともと人数が少ないので、分かれた人同士が少数になって、ある種単独にそれぞれが機能してしまっていて、それぞれの横のつながりが持てなかった、というのが一番の問題点だったと思います。サミット成功だとか学内還元とかいうための共通した目標をみんな

が持っていなかったの、先ほどお話しした通りにバラバラとみんなが活動してしまったというのが一番の問題点だったのかなと思います。

次が統一性をもったリーダーシップについてです。これはですね、学内還元とかを目標にしていたのですが、とてもプロジェクトが多かったの、リーダーが他のメンバーと同じ仕事量を常に抱えている状況で回っていました。リーダーが全体を見る暇が無かったりとか、各部署のリーダーでさえ他の部署が今何をやっているのかわからない、そういうことを把握するのが難しい状況になっていました。昨年度の僕たちはとてもバラバラ感を持っていて、共通意識という、上と少し重なるのですが、組織が上手くまとまらなかったというのがありました。

そして最後の問題が、学内活動とサミットの乖離と書かせて頂いたのですが、サミットを運営するという使命を立命館大学の学生 FD は常に持っています。僕も既にサミットの準備が始まったところからこの活動に参加したのですが、サミットの準備をやっている間、僕たちが抱えている悩みがあります。それは、サミットを運営するのはすごく大事だし自分たちの成長になるというのはみんな分かっているのですが、それをやっている間に学内活動、つまり立命館大学生にどうやって還元できるのだろうか、この活動をすることで本当に還元していることになっているのだろうかということです。そういう悩みを常に抱えながらサミットの準備をやっていました。

この悩みはサミットが終わってからも、後期の活動にも反映されていて、早く学内還元しないといけないという焦りの中からですね、あんなに沢山の自分たちでは回しきれないぐらいのプロジェクトを立ててしまって、先ほど述べたような問題点が出てきた原因にもなっております。

以上が、私が感じた 2012 年度の立命館大学学生 FD の問題点です。次はですね、ではこれをどうやって解決していったらいいのか、どうしたらもう少しよくなるのだろうかを説明させていただきます。

1つ目が、組織内での共通意識についてなのですが、バラバラになったプロジェクトですとか、こういったセクターをまとめるためには、理念、または標語という形で、みんながバラバラの活動をしているのだから最終目標はここだと、最終目標をフレーズでも何でもいいのでまず設定すること、その設定に向かってみんなで歩いていくのだという感覚をみんなで持つ、共有することが重要だと思います。

2つ目のリーダーシップ、統一性を持ったリーダーシップというのは、これは少し個人的な話になりますが、リーダーが過分に仕事を持つのはよくないのではないかと思います。リーダーは全体を統括して円滑

に活動できるように調整したりだとか、全体を把握して不足を補うだとか、そういった仕事がとても重要になってくるし、それぞれのメンバーのモチベーションにも繋がってくると思います。リーダーシップを意識してやっていきたいと思います。

そして最後に、学内活動とサミットの乖離という所ですが、これの解決点ですが、これはなかなか難しいところがありました。立命館大学の学生 FD というのはサミットをやるのだ、でも立命館大学生に対してもやらないといけない、という二項対列があったのですが、これも意識の持ち方で結構変わるのではないかと今は思っています。その一つがこのサミット運営を通して組織として成長して学内還元が行える組織まで成長させるのだ、ということです。サミット運営は、私たちは身を持って感じているのですが本当に組織としての成長が大きいです。最初入ったばかりのときは他のスタッフとは他人だったのが、サミットを乗り切るだけでいろんなことを言える仲になったりだとか、すごいスピードで仕事が出来ていくようになっていくことを実感していますので、そういった意味でサミット運営をするだけで十分自分たちの組織の成長に繋がるのではないかと考えています。

もう一つはですね、サミットによって他大学の人と交流することができます。交流という形だけではなくサミットはすごく学びが多くあります。自分たちの大学だけの小さな視点ではなくて、全国の大学生がこういう風に活動をしているのだということをですね、目の前で話して頂いたりすることですごく吸収がサミットにおいて得られます。しかし、これは各大学のみなさんも同じだと思いますが、このサミットで吸収したことをどうやって自分たちの活動に活かすのかを悩まれていると思います。これについては、サミットを運営するとかサミットに参加する前に、最初から獲得目標をしっかり定めて、私たちの団体にはこれが足りないからこれを学んでくるのだという、単純ですが必ずこれをするので、これによってサミットに参加するということだけでもすごく意味のあるものになるのではないかと考えています。

最後に、先ほども話しに出ました今年の夏サミットについて少しお話をさせて頂きたいと思います。正式決定はまだですが、既に私たちと木野先生の間でたたき台はできつつあります。今までのサミットとはちょっと違った新しいサミット、全国の学生 FD にマッチした次のステップを目標にして次回のサミットを開催しようと考えています。詳細を少し話したかったのですが、木野先生からはダメと言われ、職員さんからも正式発表はまだ早いということなので何も話せなくて申し訳ないのですが、現時点では「乞うご期待」としかいえないのですが、是非

夏のサミットを開催するのでご期待いただきたいと思います。ご清聴ありがとうございます。

耳野 ありがとうございます。引き続きまして追手門学院大学の皆さんのご報告を頂戴いたしたいと思います。梅村先生と学生 FD スタッフの皆さんよろしく願い致します。

【追手門学院大学】

梅村 それでは、今から追手門大学院大学での学生 FD 活動の取り組みについて 20 分間、お話をさせていただきます。追手門学院大学は、大阪の茨木市にある私立文系の総合大学です。学生 6000 名、大学院生 70 名。母体の追手門学院は、たいへん歴史が古く、明治 22 年 (1888 年) に創立しています。(スライドを示して) こちら大阪城、その麓に大阪偕行社附属小学校、こちらが学院の濫觴と言われております。現在は、大学院から子供園までを備える総合学院に育ってきています。過去には、華族が学ぶような学校だったものですから、「西の学習院」とよばれた時期もありました。ところが、伝統と歴史に胡坐をかいて改革を怠ってきたため、今は関関同立をはるか後塵に拝する大学になっております。

さて、当然、追手門に入学した学生は「不本意入学」がほとんど、もしくは、たまたま先生や親に進められて入った「偶然入学」の学生たちが多いわけです。そういった学生はたいへん帰属感に乏しい。大学にたいした期待を持っていない。自分に自信を抱いていない。非常に自己肯定感に乏しい学生が多いわけです。すなわち大人に認められたり、仲間に尊重されたりしたことが少ない、そういった学生が多い。でも、私はこういった学生たちを育てることを決してハンディキャップだとは思わないのです。むしろアドバンテージを得ていると思っています。なぜなら、彼らの伸びしろを温存しているからです。それを発見して伸ばしてやること。彼らの可能性を見つけて舞台に立たせること。そして自信をつけさせる。これが FD 活動の醍醐味だと思っています。私はこの活動を通して、伸びしろを温存した、可能性を秘めた学生にたくさん出会いました。この出会いこそ、私が学生 FD 活動を 4 年間続けてきた原動力です。

もう一つ、あります。それは、大学の FD 活動に対して、深い失望感、閉塞感を持ったことです。たとえば、皆さんの大学でも FD 講演会があると思います。うちの大学もあります。ところが一生懸命準備をして遠くから著名な講師に来ていただいているのに、学内の先生方はほとんど来てくださらない。FD 懇話会と言う行事があります。教授会の後に、先生方が授業改善や学生指導

について語り合います。ところが、お互いが褒めあうような偽善が続いているだけ。授業アンケートというのがあります。ところが授業改善は遅々として進まない。アンケートの結果が学内の処遇に反映されることもない。シラバスを書かされます。一生懸命書きます。でも果たしてどれだけの学生が読んでいるのかわからない。こういった閉塞感を長らく抱いておりました。何とかしなければいけないと私は思ったわけです。そういうときに出会ったのが学生 FD 活動でした。

追手門学院大学の概要、発足の経緯、メンバー構成、合意形成のあり方などは、お手元の「レジュメ・資料集」、もしくは入り口で配りました「F モンクエスト」という冊子をご覧になっていただきたいのです。300 部しかありません。早い者勝ちです。

さて、これから 2 人の学生さんに対話形式で、追手門学院大学の取り組みを紹介していきしたいと思います。紹介します。まずミスター学生 FD、羽織袴姿の山下貴弘君、心理学部 4 回生です。拍手をお願いします。それから後半は新世紀追手門大学院大学・学生 FD を背負って立つ男、森田諒亮君、経済学部 1 回生。よろしくお願いします。

梅村 山下君。われわれは 4 年間でたくさんの取り組みをしてきました。これをすべて話す時間はありません。たった一言で我々の活動を総括したらどんな言葉になるでしょう。

学生 FD スタッフ：山下 僕たちは「ハンガク」という言葉で表してみました。

梅村 何ですか、これは。禅宗の坊さんの言葉みたいですね。

山下 半分大学、半分学生の主体的な協働が学生 FD です。自治会との比較は、京都文教大学さんが後ほど発表されますのでその話は一旦置いておいて、僕たちは自分たちがやりたいということと、大学が目指している教育とか教育改革とかというものに添った形で活動をしてまいりました。

梅村 なるほど。それにしても山下君、そもそもどうして大学の授業改善に一肌脱ごうなどと、そんなこと考えたのですか。自慢ではないですが、私は学生時代に大学の授業を変えようなどとは一度も思ったことはありません。何故ですか。

山下 それは、先ほど登壇された木野茂先生のご講演を追手門学院大学で聞いたことがきっかけでした。実は1年生の頃、言葉が悪いのですが教員退治を目指していました。授業の際、教科書を持ってこられたのですが、多分初めて開いたろう教科書を開いて、どこを読むのだと言つぶやいたところから、ただ教科書を読みあげるだけ。大学ってなんなのだと思ったのが、僕が授業に対する不満の始まりです。

そんなとき、木野先生が追手門学院大学でご講演された際、学生とともに進めるFD活動についてお話いただき、学生でも大学や授業に関わって、よりよくできることに衝撃を受けました。

梅村 当時は「嘸みつきFD」なんて呼んでいましたね。それがどんな心の変化があって、追手門FDのミッションが変わって行ったのでしょうか。

山下 教員退治を目指していた際、僕は「嘸みつきFD」と呼ばれていたのですが、スタッフの中には先生ともっと関わりたい、成長したい、居場所がほしいという想いの学生がいて、その結果、身内で喧嘩することが多々ありました。しかし、このままではいけないなということで、まず学生と教員が何を求めているのかということを知ることから始めました。

梅村 意識調査ですね。

山下 はい、そうです。意識調査という形で学生たちに授業で何が良かったのか、なにが悪かったのか、どういったところが問題なのか、もっとこうしたらよいと思っていることを自由記述で書いてもらいました。他方、教員の方々にも同じ記述をとり、どのようなことを学生に望んでいるのか、意識調査を行いました。その結果を簡単に申しますと、学生も教員も双方コミュニケーションを取りたいのだという結果が出たのです。つまり、コミュニケーションの場が足りていないと考え、教員と学生が参加するしゃべり場というグループワークの場を設けました。

梅村 この意識調査としゃべり場でいろんなことに気がついたと思います。どんなことだったのでしょうか。

山下 学生は、もっと教員の方々とお話したい、もっと質問してみたいですか、教員の方々も学生って今何を考えているのかが分からないのでもっと教えてほしいということです。また、職員さんにも参加していただき、

職員さんから教・職・学が繋がるアイデアをいただきました。しゃべり場を通して、改革したい改善したい、もっとこうだったらいいのにといい想いをみんなもっているのに、それらが実現されていない、そこがもったいないなということで、僕たちは教員・職員・学生が一体となって改善に取り組めるよう、「橋渡し」を理念に掲げて活動をさせていただきました。

梅村 これがいわゆる追手門大学院大学学生FDのミッションですね。橋渡し。教・職・学の橋渡しということですね。次の活動は。

山下 橋渡し後の中でも、特徴的な活動を紹介させていただきますと思います。

梅村 教員図鑑。われわれ「追大教員図鑑」と呼んでいますけれども、これは先生方の研究室を学生が訪問してインタビューする、そのインタビューの結果を一冊の本にまとめていく、いわゆる教員WHO'S WHOにあたるものですね。今、どこの大学でもオフィスアワーつてありますけれども、ほとんどの学生は先生の研究室を訪れませんね。実際に研究室に伺って、教授の先生のお話を直に聞いて、どういう感想を持ちましたか。

山下 教員図鑑は、ゼミ選びや先生を知りたいけれど、実際にオフィスアワーまで行くにはハードルが高い、ということで僕たちはゼミでどんなことをしているのか、研究は何をされているのか、趣味はなにか、学生時代何をしていたのか、という話を聞かせて頂きました。これらを学生に伝えることによって、先生を知ったり、先生と関わるきっかけになったりしました。また、この活動を通して、追手門にはこんな先生がいるのだと、追手門にとっての財産を知ることができると僕は思うのです。教員図鑑のほかにも、入学前の高校生向けの授業や、職員さんのSDセミナーにも参加しました。こういった取り組みを、他大学で発表させていただいたのが2010年の活動になります。

梅村 山下君。そうこうしているうちに大変な激震が追手門を襲う。これが先ほど誤ってクリックしたサミット開催決定ということですね。びっくりしましたよね。サミットの天命が下ったとき、あなたはと思いました。

山下 本当にびっくりしました。学生FDサミットは、これまでに立命館大学で4回開催され、1回目から参加させてもらっているのですが、こんな大役を僕たちに

できるのだろうかと悩みました。

梅村 ここにいるスタッフほとんどが反対していましたよね。

山下 さきほど立命館大学も課題に挙げられた学内の連携や、学生間のトラブルというものを多く抱えていましたので、そもそもこんな状態で開催できるのだろうかという懸念があったのです。しかし、大学のため、学生FDのためにやろうと決めました。ただし、学内の活動は手を抜くことなく更に力を入れようと決めたのです。

梅村 そうですね。サミット主催校にふさわしい成果、活動が求められると思ったわけです。それで取り組んだのが「学生発案型特別講義」です。これは学生に人気のある先生に、あるテーマで講義をお願いする、学生自身が授業を運営する試みでした。たくさん学生が集まってくれました。手ごたえを感じたのではないのでしょうか。

山下 学生発案型特別講義は、さきほど木野先生のスライドにもありました、学生と共に作る授業の一つなのかなと思います。テーマ設定から講義の形、どういった進行をするのか、どこの教室でやるのかを先生と話し合い、当日は単位が出ない講義で、しかも木曜の4限というなかなか参加しがたい時間にも係わらず、学部学年を超えた約70名の学生が参加しました。講義を通して、知りたい、学びたい、人と話したいという人がこれだけいるのだと感じました。もう一つ、講義は対話型で行わせてもらったのですが、先生からなかなか普通の授業ではできないけれどもこういった場なら挑戦できるという、こんなことやってみたいという先生の想いも達成できたと思います。

梅村 次は「学生FDのWA」ですね。これは追手門学院大学と京都文教大学の共催の企画です。学生FD活動のさまざまな課題を、既存のノウハウを学んで克服していく、いわゆる学生FD活動の「広がり」と「深まり」を企図とした企画でした。どうでしたか。

山下 関西圏で多くの学生FD活動が始まりました。大学の形態も違う、多様な学生FDの形式をとっていたのですが、その中でも課題というのは幾つかに絞られてきます。そういった課題に対して、大学の壁を越えて一緒に課題解決を目指した企画です。学生FDに取り組んでいない大学からの参加や、イベントごとのテーマを学生が提案するなど、広がりや深まりは回を追うごと

にステップアップしていると思います。これからも継続することを期待しています。

梅村 次に行きましょう。そしていよいよ、去年の2月25日、26日に追手門大学院大学で学生FDサミット2012が開催されました。このときは、先ほど木野先生のおっしゃったように、全国から56の大学、340人の教職員、学生が集まりました。しゃべり場、3つのワーク、そして宣言と、新しい学生FDサミットのあり方を示しました。詳しいことは、皆様のお手元にあると思いますけれども、学生FDのガイドブックの最新刊、「学生FDサミット奮闘記」。こちらをぜひともお買い上げいただいで、お読みください。現在、ナカニシヤ出版にFAXで申し込みますと、2625円の本が2100円で購入できます。山下貴弘君、ありがとうございました。だいたい時間も押してまいりましたので、森田君、急いでいきますよ。サミットを成功させた4回生のパワーというのは凄まじいものがありましたね。

学生FDスタッフ：森田 本当にビックで偉大な存在ですね。発想力とか行動力のある凄い人たちだなと思っています。

梅村 私もそう思います。サミットが終わった後、われわれ追手門FDには、沈滞ムードが漂いましたね。いわゆる燃えつきってしまったのです。

森田 そういう中で、僕たち1回生、2回生を中心とする新メンバーが加入したのですが、僕たちも何をしたらいいのか分からず戸惑っていた時期もありました。

梅村 戸惑いの中で、一年間こういった活動を続けてきた。どうして学生FD活動に執着してやっているのですか。

森田 先ほど不本意入学と言われていたのですが、ぼく自身がその一人で、授業が楽しくない、大学とはこんなものかと感じていた。そんな時に、学内でこの学生FDがしゃべり場というものを開いていて、それに参加してみても衝撃を受けたのです。こんな活動をしている学生がいるのかと思って、大学楽しくないと思っていたのは、ただ自分が何も考えずにふらふらしていたから感じただけで、いろんな人と交流することでもっと知りたい、もっと学びたい、もっと勉強したいと感じるようになりました。それが一番の理由です。

梅村 それでは、新世紀追手門大学 FD の新機軸。新しい活動を3つほど紹介していただけますか。まず1つ目は、ベストティーチャーアワード。これは何ですか。

森田 これはアンケートなのですが、学生が選んだピカイチの先生をランキング化して HP 上に公開するものですが、先日第2回目を発表したばかりで、こういったポスターでも宣伝しているのですが、梅村先生、表彰された先生方の反応とかはどうですか。

梅村 表彰された先生方は、みんな非常に照れていました。ただ褒められて嫌な先生はいないです。「明日からの授業の励みになります」といった先生が多かったですね。

次の企画に行きましょう。教育研究所セミナー、学長理事長と対話集会。これは本学に今年の6月に就任した坂井東洋男学長、そして川原理事長を招いて学生と対話集会をしたんですね。「学生が知りたい成績評価」「シラバスと実際の授業内容とのズレ」「大人数授業と少人数授業」こんなテーマで話し合いましたね。理事長からこのセミナー運営の功績を称えられて表彰状をもらったそうですね。

森田 何千人という学生の中で表彰状をもらったのは凄くうれしいことでした。理事長にただ認められたので終わるのでなく、次につなげるように、また学長や理事長を呼んで対話集会をしたりとか、今度は学生から学長や理事長に何か提案を出したりだとか、次の活動に繋げて行きたいと思っています。

梅村 ちなみにこの坂井東洋男学長は、以前、京都産業大学の学長をしておられました。次はどうでしょう。

森田 「学生 FD 新聞」というものなのですが、これは学内で発行しているものになります。サミットを開いたことで学内の教職員さんからのサポートは結構得られたりして予算も出るのですが、学生からの認知度が低いままだなということで、それをきっかけに始めたものです。紙面の半分はもちろん活動報告をしているのですが、もう半分がどんな人が活動しているかを示すためにメンバーの魅力とか趣味とか個人のコラムとかを書いていきます。そしてどんな活動をしている団体かだけでなく、どういった人が活動しているかをしっかり見せていこうというものになります。梅村先生。こういった学生 FD の参画型 FD の成果とか目に見える変化はあったりするのですか。自己満足で終わっていないかと思うところがあ

るのですが。

梅村 たぶんこの会場にいらしている方の中には、「なんだこの活動は当事者の自己満足じゃないのか」と思われた方もいるかも知れません。たしかに、大学が学生の力でドラスティックに変わった、こんなことはありえないのです。でも目に見えない変化が萌えてきています。着実に追手門学院大学は変わってきています。例を4つほど挙げましょう。まず、会議や研修のあり方が抜本的に見直されたということがあります。管理職研修ですとか FD 研修会ですとか、教職員の研修の中に、いわゆるしゃべり場形式が取り入れられるようになりました。いわゆる「情報共有、合意形成」の会議から、「アイデアを創出する会議」に変わりつつあります。模造紙や付箋紙を使って会議の内容を「見える化」する取り組みも盛んになりました。2番目。教職員と学生との協働、教職員が学生を称揚・支援する活動、学生の視点や意見を尊重する企画が目立って増えてまいりました。詳しく説明する時間はありませんが、学生 FD サミット以降、学生を中心に据えた企画、学生を取り込む企画が、さまざまな部署から、次から次に止めどなく提案され実施されるようになりました。3番目。「教育開発センター」という FD 推進を目的にした組織が独立し、その規定の中に「学生 FD 活動の支援」、この9文字が始めて明記されました。大学がやっと学生 FD 活動を認知してくれたのです。4番目、自分の大学を好きになる学生が増えました。これは大きな変化です。先ほども申しましたように、不本意入学、偶然入学の学生達が自分の居場所を発見する。大学の改革に貢献することによって、自分がここにいてもいいのだという安心感を得る。これは非常に大きいことだと思います。学生 FD 活動は学校教育でもあるのです。

ところで、追手門学院大学の学生 FD 活動には、さまざまな問題点があります。たとえば、組織のサステナビリティ。存続維持の問題。学生 FD 活動は極めて属人的な活動だからです。卒業や異動のたびに存続の危機が訪れる。実際に山下貴弘君はもうすぐ卒業、梅村もいつまで今の立場でいられるかわかりません。そして、2番目の課題、会議のあり方や人間関係。森田君、これは目下の課題ですよ。

森田 言葉にして、伝えないと分からない。というふう在最近言われたのですが、なかなか口に出して相手に自分の考えとか想いを伝えるのは難しいことだと思います。そういったところでズレとか衝突を生んだりして、もっと思いやりの心をもって活動をしていけたらと思います。

梅村 そうですね。3番目の課題、学生FD活動が、イベントの高揚感や一体感、もしくは個人の成長の実感に留まりがち。学生FD活動の目的は、学生の視点を取り入れた大学の教学改革だったはずなのに。

山下 そうですね。あくまで僕たちは教学改革を目指しているので、「僕たちは成長しました」が結果ではダメなのだろうと思います。やはり目に見えた変化を考えなければいけないと感じています。

梅村 4番目の課題ですね。これは私の考えです。学生FD活動が盛んになりました。でもFDの主体はやはり教員です。FDは教員の仕事。学生が教員に色々働きかけてくれます。授業に対していろんな関与してくれます。それを教員は「ノイズ」として聞き流すのではなくて、「シグナル」「メッセージ」として受け取ることが大事だと思います。教員の感受性が問われるのです。これは自明なことだと思いますけれども、改めて確認しなければいけないことだと思います。

では最後に、森田君に締めてもらいましょう。これからの3年間どんなことを成し遂げたいと思っていますか。

森田 今はまだ教・職・学の橋渡しの途中だと思っています。大学の主役である学生の声を取り入れて改革をしていかないとだめだなというのがあって、学生の認知度をアップさせていこうというのがこれから追大学生FDの目標です。

梅村 では、山下君。最後に一言お願いします。

山下 様々な閉塞感を抱えて僕たちも活動してきました。先生方も抱えていらっしゃるように僕らも抱えています。他方でさまざまなアイデアというのが、教職員、学生問わずにあると思います。この後も、京都文教大学、京都産業大学と発表が続きますが、自分の大学に活かせるもの、これだったらやってみたいというものを見つけて帰って頂ければと思います。どうも、本日は清聴いただきありがとうございます。

耳野 どうもありがとうございました。それでは引き続き京都文教大学教務課係長FD委員会委員、FSDプロジェクトメンバーの村山孝道先生ならびに京都文教大学FSDプロジェクトメンバーの皆さんです。

【京都文教大学】

村山 それでは京都文教大学から発表をさせていただきます。

と思います。まず自己紹介からさせていただきます。京都文教大学教務課係長の村山孝道と申します。大学の開学と同時に入職いたしまして現在17年目になります。教務課に長くいた後、一時期学長秘書として総務部門に異動いたしました。その後新学部の新設と共に現在の教務課に戻ってまいりました。現在の職務を「委員会の一覧」という形で表示させていただきましたのでご覧ください。今日はその中でこちらのFD委員会、FSDプロジェクトという2つの活動の中で係っていることについてご報告をさせていただきます。余談ですが、実はつい先日木野茂先生をお呼びして教員向けのFD研修会を行ったのですが、企画・立案・運営をこのFD委員会が支援するFSDプロジェクトが行いました。そして、なんと学生が研修の講師をし、且つ、学生や職員も交えて「しゃべり場」を行いました。これが大変盛り上がりまして、終了後先生方が寄っていらっしゃって「本当に楽しかった」、「ありがとう」と口々に言っておられました。

さて、本題に戻りますが、今日の大テーマは「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには」ということです。誠に難しいテーマではありますが、何かヒントをご提案できればと思っています。内容に入る前に一点、皆様のお手元の冊子について訂正を一箇所させていただきます。(画面のように)私の紹介の欄に「専門領域」として沢山のことが書かれています。これは私のミスでして、やり取りの際に「専門領域はございません。なお、関心を持っている領域はこれです」という風に余計なことをお送りしたため、このように専門領域となってしまいました。ただし、関心領域には違いございませんので、これも何かのご縁ですので、数年後には胸を張って「専門領域です」と言い切れるように頑張りたいと思っています。

それではここで、学生FD代表の中村にバトンを渡します。

FSD プロジェクトメンバー：中村 京都文教大学臨床心理学部臨床心理学科3回生の中村 侑貴と申します。今日はよろしくお願い致します。前のスクリーンにも書いてあるのですが、大学学生自治会の代表を2011年度から担っておりまして、今年の6月でようやく後輩に譲ります。去年FSDプロジェクトの代表も兼務することになりまして、後で僕の「型論」というところで紹介させて頂くのですが、自治会長とFD団体の代表を兼ねているところが京都文教大学の特長となっております。余談ですが副学長がこんな格好をしてくれる大学です。始めに、発表時間が限られていますので本学ならではの特長のみに絞って発表させていただきます。詳細

な活動、活動経緯、概要については資料集のSの2の12ページに記載しておりますのでそちらをご確認ください。このパワーポイントに沿った資料はございませんので、目をスクリーンに、耳を私たちにお貸しいただけたらと思います。

それでは京都文教大学の簡単な概要から説明させていただきます。京都文教大学には臨床心理学部と総合社会学部の2学部がございます。大学が2学部3学科、大学院が2研究科ありますので約2000人学生がいて、同じキャンパスに短期大学の学生もいますので計3000人の学生が通っております。少し自慢をすれば地域貢献度ランキングという日経グローバル2010年に出されたもののなのですが、近畿の数々の名門を差し置いて第2位という結果をいただきました。これも自慢ですが、新聞への掲載件数も337件ということで平均一日一件京都文教大学の名前が新聞に載ったということです。

さてここからFDの話に入っていくわけですが、私たちの大学のFD団体はFSDプロジェクトという名前で活動しているのですが、追手門大学や京都産業大学、立命館大学にもFD団体はあります。じゃあFSDプロジェクトとどこが違うのかを中心にこれから話をさせていただきます。団体や組織といっても様々な型があると思います。まず横軸が自主自発度、縦軸が組織度ということで表を作成してみました。そこでFSDプロジェクトの「有志、草の根型」というのは極力組織度を低くして自主自発度を高くするように心がけています。次に様々な型の目的のスライドに移りたいと思います。「授業改善型」、これは非常にFDっぽいですね。「サークル交流型」、様々な学生と交流したいという目的を持っているのではないのでしょうか。「学生生活型」、要はリア充目的。大学の施設をどうにかしたいとか、学生の生活を送るうえで、不便な制度を改善したいという目的で活動している。様々な目的が団体にはあると思います。しかし、どの団体もこの4つの1つに寄っていると思います。ですが、京都文教大学ではFD団体と自治会の代表を僕が兼ねて、連携していることによって、漏れがないように尚被らないように活動できるということが私たちの強みになっています。まとめますと京都文教大学があり、その中に正課と課外があります。正課は授業の中でもゼミや卒論が挙がっています。課外、クラブ活動やボランティアも広く言えば課外になりますし、恋愛というものもしかしたら課外になるのかも知れません。その正課と課外が真ん中で被った部分に私たちFSDプロジェクトと自治会が共存している形で活動しております。真ん中で共存していると言いつつも少し正課に寄っているのがFSDプロジェクトであります。そして自治会が課外寄りとして

います。

活動概要ですが、簡単に申し上げたいと思います。FSDプロジェクト活動の目的は小規模大学である強みを活かしまして「京都文教大学の学費を学生と一緒に使い切る」というのがFSDプロジェクトの目的となっております。サポートするとか支援するとかではありません。僕らも一緒に使い切ります。続きまして、キャッチフレーズが3つあります。「京都文教大学を元気に」、「京都文教を学費以上に使い切る」、「フェスタ感」です。3つめのフェスタ感はあとで自校教育の部分でいいますが、要はワクワクドキドキさせるということです。学生に楽しんでもらい、そして前向きに関心を持ってもらえるように少しお祭り感覚な感じを持たせております。

続きまして取り組み概要にうつります。簡単に分けますと6つぐらいに分かれるかなと思っております。ざーっと流しますね。沢山活動を上げていけばあるのですが、6つに分けた中にインプットと言う言葉がありました。イベントを企画・運営するには今自分たちが持っている知識だけで挑むのではなく、必ずインプットしてから臨むようにしています。どんなインプットをしているのかを挙げますと、他者との関係性を構築する力、チームビルディングやコミュニケーション、ファシリテーションなど、組織を動かす力、しっかりと伝える力、新たな価値を創造する力という風にこういった知識を必ずインプットしてからアウトプットするように、アウトプットした後に振り返るために更にインプットするというサイクルを常に意識して私たちは活動しています。この後村山さんの方から我が大学の自校教育である、京都文教入門という私たちの強みの部分を発表させて頂きたいと思いますのでバトンタッチいたします。

村山 再び戻りました、村山です。その前に先生方、今日のフォーラムのテーマは「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには」ということなのですが、この「学生が」という言葉はだれに向けられているのでしょうか？どうでしょう、教育の現場では今も昔もどの大学も、やる人は放っておいてもやるし、やらない人は何を言ってもやらないというのが先生方の率直な感想ではないのでしょうか？だとすればこの「学生が」というのは誰に向けられているのか？これは、(2:6:2で分けた時)「放って置いてやる」高モチベーションの「2」の人では明らかにありません。その下の「6」の人に向けられているのだと思います。これは先ほど梅村先生がおっしゃった「偶然入学」、「不本意入学」、高校からたまたま近いから来た、という学生に多いと言われています。そして、そういう学生は日本の大学には増え続けていると言われています。

この(「6」の)人たちがその大学の価値を決めています。卒業し社会に出て行くマジョリティーはこの人達です。この人たちを放っておいて、どこの大学にもいる「上の2」の人たちと授業をしていたらそれは楽しく、気持ちいいですが、マジョリティーは「6」であり、その人達が実はその大学の価値を決めています。ですからエネルギーをかけないといけない。

先生方、こんな経験はありませんか？

「学生のときに何かをやり遂げてください。就職のときに必ず聞かれますよ。後で困りますよ。」

そして3年後。

「ほら言った通りでしょ。あの時私の言った通りにしておけばよかったのに。いまさら遅いよ、自業自得だよ。」

確かにこれら学生さんが何もしなかったのは事実です。ですが別の見方をしたら大学が「主体的に学ぶ力」をその学生さんにつけるチャンスを与えきれなかったとも言えるのではないのでしょうか？「その気にさせきれなかった」と言えないのでしょうか？ではどうすればよかったのか。例えば宿題を増やす、強制的に勉強をさせる。説得をする。それでもダメなら懇願する(笑)。それも有りでしょう。しかしこれで本当に勉強をするのでしょうか？これら危機意識の寛容というのは「外発的動機」へのアプローチと言われています。我々プロジェクトのメンバーはこれまでの経験から「外発的動機」だけでは不十分だと考えています。では何が必要か。「内発的動機」です。本人の内側に「やりたい」という想いを育む。そこには「好奇心」、「憧れ」、「悔しさ」、「自己実現の欲求」といったものが非常に大切になると我々は考えています。

というわけで、この「内発的動機」を初年次必修である自校教育科目、「京都文教入門」の中で育てている取り組みについてご報告をいたします。この科目は、教職・学協働のFSDプロジェクトが企画・立案・運営をしています。その中でも、主に上級生の学生が主体的に活動をしています。

もともとこの科目は2009年に生まれました。最初は大学を良く知ってもらおうという目的だったのですが、ご覧の通りスタンダードな「役職者の淡々としたリレー講義と、地域の歴史を学ぶ歴史学」で、実は講義をする方もされる方も非常に不満の高い授業となってしまうました。科目担当者の副学長(仏教学者)は当時を振り返って、「仏像を作って魂を入れてなかったなあ」と振り返っています。そこで、この年の受講を終えた学生の有志を募り、先輩学生を交えて茶話会を開き、翌年度

の「京都文教入門」を学生とともに再構築しました。その後2010年、2011年、2012年と特徴的な取り組みを行って改革をしてきました。基本戦略は沢山あるのですが今日は2つだけお伝えします。

まずはステップ1、「選択肢の提示」。そしてステップ2「証拠の提示」。これを行う「Bunkyo Menu」と「プロジェクトPRフェスタ」についてご説明いたします。

さてここでご想像ください。3回生の学生のあるシチュエーションです。

学生 「先生、エントリーシート書くのですがなんて書いたらいいですか？」

教員 「何って君、じゃあ大学でいままで何をやってきたの？」

学生 「何といっても、特に…。バイトはしてしまいましたが。何と言われても困りますが、そういえば2回生の時に行ったボランティアは結構印象に残っています。」

教員 「ほう、ボランティアやったの？それはボランティアセンターからの紹介を受けて行ったの？」

先生 「それ、何ですか？ボランティアセンター？そんなのあったのですか！えー、もっと早く教えてくださいよ！先生。」

こういう経験は無いでしょうか？このように大学のリソースを何も知らないまま3回生まで来た。我々の大学はわずか2000人の学生しかいません。それでもこのようなことが起きます。これから就職戦線に乗り出すのに何も武器を持っていない。あまりにももったいないし、あまりにも可哀そう。そして我々からしたらあまりにも申し訳ない。という思いがありました。

そこで発想したのが「Bunkyo Menu」です。大学のリソース、「モノ」や「コト」を全部メニューにして全員に見せる。3回生になったときには「知らなかった」とは言わせない。そんな想いで作りました。中には何十項目にもわたって様々なことが書かれています。このMenuを教材にして、1回生全員の前で上級生と職員が京都文教の魅力や使い方を紹介していきます。

ちなみのこの科目、担当の先生が頼んでもいないのに学生が勝手にパンフレットを作っています。これがそのパンフレットの表紙です。そしてこれが科目担当の副学長の先生です。中身には京都文教入門の「3つの目的」、「3つの特徴」、そして「他大学では味わえない京都文教大学の魅力」などが書いてあります。そしてここを見てください。「日本中探しても本学しかない完全オリジナルの授業となっている。」という風なことが書かれています。このように、先輩学生たちがこの科目に誇り

を持って、後輩に様々な仕掛けを提供しているのです。

さて、「Bunkyo Menu」には、例えば補助金 30 万円を獲得できるプロジェクトの申請方法とか、種々施設や部署、各種サービスやプロジェクト活動などが載っています。これがステップ 1 の「選択肢の提示」です。

そしてステップ 2。次は「証拠の提示」です。Menu を作って配るだけでは「一步」は踏み出しません。Menu にあるような大学のリソースを活用し、実際に「学費以上に京都文教を使いきっている」上級生による大プレゼン大会をします。京都文教ライフをエンジョイしている生きた証人たちが目の前に次々に現れるのです。「プロジェクト PR フェスタ」というイベントですが、何しろ 1 回生の必修科目です。もしかしたら聞きたくもない人が嫌々座っているかもしれない、というシチュエーションです。なので「プロジェクト発表会」という真面目なやり方ではおそらく聴衆の心をつかみ取れません。もっと積極的に、こちらから 1 回生のハートを驚嘆みにしに行く、というようなことが必要となってくる。先ほど中村が「フェスタ感」と言うこと言いましたが、それがキーワードです。

このように学内のさまざまなリソースを活かしつつ、興味、好奇心を引いていきます。(写真のように) 1000 人ほど入る大ホールで上級生たちが司会をしたり、プレゼンテーションをしたり、様々な演出をしていきます。このイベントの最後には上級生の皆さんが 1 回生の前にずらりと並んで「京都文教楽しいよ」、「大学生活楽しいよ」と伝えます。そうするとこんなコメントカードが寄せられます。

「全然知らなかった、いい大学ですね。」「この大学を少しだけ好きになりました。」「先輩のような大学生活を送りたい、今のままではだめだと焦った。」そして「京都文教を誇りに思う。」

「誇りに思う」という言葉は本当に嬉しい言葉でした。このように生き生きキラキラとした先輩学生の姿は、「6」の人たちにすさまじい影響を与えるパワーを持っていると感じます。「内発的動機」が刺激され、強制ではなく、これをきっかけに自らの意志で「主体的に学び」始める、というストーリーです。

この 2 コマのほか、15 コマ中 8 コマを学生たちが中心となって企画しています。例えば携帯解禁・私語厳禁、しゃべる・なつぷやけ」の「つぷやき授業」というのがありますが、これは明日ポスターセッションでブースを設けますのでぜひお立ち寄りください。そのほか、「公開しゃべり場」、ラーニングバリュー社の「自己への探求」の導入などを計画しております。

さて、まとめます。結論 1。「強制より好奇心を」。2:6:2 の「6」の人たちには、「外発的動機」よりも「内発的動機」が必要である。上級生の生きた姿がもっとも効果的である。そして、実は同時に下級生に働きかけているときに、上級生自身がどんどん「主体的学習者」になっていく、という効果もあります。

結論 2。「試合、本番が必要」。知識は持っているだけでは意味がなく、活用と実践が必要です。試合、本番があるからこそ練習に身が入り、主体的に取り組みます。学生 FD の世界には大きくて華やかな試合、本番の場がたくさんあります。インプットしたものをアウトプットする場がたくさんある。これが学生 FD の魅力、強みだと思っています。

しかし、一方で弱みもあります。その弱みについて少し説明をしたいと思います。まず一つ目の課題は、簡単に言うと学生 FD 活動の「仕事化」です。例えば自治会は学生による、学生のための、学生の活動です。大学の委員会活動や業務と互いに干渉しあうことはあまりありません。ところが学生 FD 活動というのは、学生の主体的な活動と、大学が業務として FD 委員会などがやらなければならないことが多く被っています。ここが学生 FD 活動の大きな特徴です。そこにはリスクがあります。それは何かというと、「便利使い」、「仕事化」、「やらされ感」、「うきうきわくわく感の消失」といたものです。こういう経験は、これから学生 FD を始められる大学は必ず経験されるのではないかと思います。今後学生 FD 活動が末永く続くかどうかは、この問題とどう付き合いかにかかっているのではないかと思います。学生 FD 組織のベクトルと、大学のやりたいこと、やらなければいけないことのベクトルを合わせていくという作業が必要となっています。「チームビルディング」をしていく必要がある、ということです。教職員側に必要な視点としては、このように学生 FD は学生のための主体的な活動ではない。しかし教職員のみの主体的な活動でもない。両者による活動が学生 FD 活動である、という視点です。そこが委員会活動とも違い、学生自治会活動とも違うところです。学生 FD 活動において「学生主体」という言葉は実は私は嫌いです。自分が取り除かれているような気になります。私も入れてほしいのです。なので、主体は「学生」or「教職員」ではなく、あくまで「教・職・学主体」にしてほしい。学生主体は寂しいと思っています。願わくば学生もそのような視点を持ってほしいと思っています。

つぎに 2 つ目の陥りがちな罠、課題は「のに」という言葉です。一所懸命やり始めると、「自分は精一杯やっているのに」という気持ちがもたげられます。「のに」と

いう言葉は他者に向けて投げられ、他者を遠ざけてしまいます。他者に対して攻撃的になってしまいます。これが2つ目の課題です。これを自分にぐっとひきつけば「のに」は生まれません。目の前の活動を自己犠牲ではなく、自分の成長に直結させる。これが学生FDを続けるコツだと思います。たとえば学生FD活動によってゼミや卒論など学業に良い影響がある。活動の中で得られた知識、技術、挫折感、達成感は就職活動に役に立つ。あるいは培ったコミュニケーションの能力は将来円満な家族を構築する。リーダーシップは将来子育てや地域の活動に役立ち学び、成長しスパイラルアップしていくディベロップメントのノウハウは人生そのものを豊かにする。そのような考え方を学生たちと共有し、実践し、信じる。それができてこそその学生FD活動だと私は思っています。これを言い換えますと、「俺のために、人のためになることをする」。自分自身に良く引きつけた、素敵な言葉ですね。我々仲間の学生が作ってくれた言葉です。これは自己犠牲、一方的に提供するというのではなく、ウィン・ウィンの関係の言葉だと思います。実はこのことを他にも言った人がいるのです。誰かご存知でしょうか？この人です。菩薩。「自利即利他」。これは本学の建学の精神でもあります。このように学生FDに関わる学生の皆さんは、やらされている、あるいは誰かにやってあげているという気持ちは持たずに、「自分たちが一番得しているのだ」、とやってもらいたいと思います。そして先生方も学生がやっているから、便利だからやらせよう、ではなくて、一緒に付き合っていただければと思います。彼らは目的を達成するために、何日も何日も、徹夜をしたり合宿をしたりしてやりとげているのです。一円にも、一単位にもならずとも。自分たちのためにやっているのです。そしてその上で他者のためにやっている。そこにはやっぱり情熱が必要だと私は思います。

さて、学生FD活動が最も素敵なところは、今日のような大きなステージ、「本番」や「試合」の場があることだと思っています。私にとっても中村にとってもそうです。ものすごいチャレンジの場で、「本番」で、「試合」の場です。最近あまり寝ていないので肌もがさがさで口の中も口内炎いっぱいで大変です。この時期教務課の仕事だけでも大変で、それにプラスでこのような活動をやっていると本当に大変です。しかし、今こうやって終わりを迎えるにあたって本当に清々しい気持ちです。やってよかったと思える。昨日の自分よりちょっと成長した気持ちになれる。未知との自分との遭遇が得られる。そしてもしかしたら他者への貢献もできたかもしれない。学生FD活動ではこういう場がたくさんあります。しかも

それを学生と一緒にすることができる。

これが気持ちいいですね？これが癖でまたやってしまうという、そんなことはないですか。中村君。

中村 確かに活動中はしんどい時もあります。こういう企画をするというのは学生生活ではなかなかないことで、僕もここに立っているのはすごく感動しているわけです。僕は冒頭でも申しましたように学生自治会の代表とFD団体の代表をやっているということで、それぞれメリット、もしくはデメリットが存在します。学生自治会のメリットは学生主体で学生だけでやれることなのですが、逆に言えば学生が潰れてしまえば何もなくなってしまうわけです。だから最近では全国的にも学生自治会がどんどん廃れて行っているという現状があるのですが、学生FD活動には教職員さんがいらっしやいます。それはすごく強みではないかと僕は思っています。教職員さんが前のめりになって、「～やって」、「頑張つて」、「期待しているよ」というのではなく、前のめりになる。奪うというわけではなく、前のめりになって学生と一緒にやっていくことは学生からすればすごく心強くて嬉しくて楽しい気分になります。言わずもがな学生数のほうが教職員の数より圧倒的に多い。それでも学生に対して前のめりになってくれる姿勢というのは我々学生からすればすごく嬉しいです。

村山 このように自分の大学を好きな学生さんはどの大学でも必ずいるはずですが、バラバラと散在しているだけ大学は変わらないと思います。それをギュッと集める。職員や教員の中にもいらっしやと思います。それらをギュッと集めて勢力を作って学校を盛り上げて楽しくしていく。そうするとこの日本の大学はもっともっと楽しく盛り上がっていくのではないかなと思います。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

耳野 ありがとうございました。それでは最後になりますが、京都産業大学学長室の山内尚子先生と学生FDスタッフの皆さんです。よろしく願い致します。

【京都産業大学】

京都産業大学 学生FDスタッフ燦の活動紹介にあたって(補足説明)

山内 今回、本学の学生FD活動の紹介をさせていただくにあたり、「燦らしさ」が発信できる方法は何か、活動を通じて、学生たちが日々考えていることをどう織り交ぜて発表するかを、燦で検討した結果、劇調のプレゼンテーションという形でお伝えすることにしました。

当報告集では、学生たちが制作した台本を掲載した

します。活動紹介等、プレゼンテーションでご紹介しきれなかった内容については、予稿集にまとめておりますのでそちらをご確認いただければ幸いです。また、当日のプレゼンテーションの様（映像）は、YouTubeにてご覧いただけますので、併せてご覧ください。
<http://www.kyoto-su.ac.jp/outline/approach/excellence/kyouiku/fdstaff.html>

京都産業大学 燦

検索

京都産業大学 学生 FD スタッフ燦 活動紹介

～オープニング映像～

学生 FD スタッフ：若宮 それでは、京都産業大学学生 FD スタッフ燦の活動紹介をさせていただきます。京都産業大学総合生命科学部 1 年次の若宮 健と言います。よろしくお願い致します。

学生 FD スタッフ燦は 2011 年の 6 月に結成されました。もうすぐ結成してから 2 年が経ちます。現在は 45 名の学生で活動を行っています。

「燦」というのは、私たち学生 FD スタッフの愛称です。「学生 FD スタッフ」と言うのは呼びにくいですし、馴染みにくいので「燦」と名付けました。「燦」という名前には、「京都産業大学において、燦々と輝き続ける団体でありたい」、「京都産業大学がより明るく光り輝く大学になってほしい」という願いが込められています。

「アホなことを真剣に、マジメなことを楽しく。」は燦の活動理念です。「アホなことを真剣に」には、「どんなふざけたことにも手を抜かず、全力で取り組む」という意味、「マジメなことを楽しく」には、「教育の改善というお堅い活動をいかに楽しみながらやるかに心血を注ぐ」という意味が込められています。僕自身もこの活動理念に惹かれて、燦に興味を持ちました。少し見えにくいですが、後ろのスライドの写真では「どうして恋人ができるのか？できないのか？」について真剣に話し合っています。他にも、40 分の自己紹介 DVD の作成に 4 か月掛けたり、最初の動画もそうですが、僕は燦のそういうところが結構好きです。

次に活動目的について説明します。私たち燦は活動を始める際、他大学の学生 FD スタッフとの交流を積極的に行い、「本学では何ができるか、何をすべきか」について議論を重ねました。その結果、燦の活動目的は、「学生、教員、職員が協力し、より良い大学を創っていく」という広義の FD、OD (Organization Development) であることが結論付けられ、それを達成するために私たちは "Academe Co-Creation"、"大

学共創」というスローガンを掲げるに至りました。だから、私たちは、自分たちの団体のことを「AC 燦」と呼びます。私たち AC 燦は、主に①学内における「大学共創」の場と機会の提供、②意見の集計・分析、③分析結果の学内外への発信を行っております。現在は、情報収集と情報発信が中心ですが、これからの活動の中で、実質的に大学の発展につなげていく予定です。これらの活動は、全て学生が中心となって取り組んでいます。企画を考えるのも学生、打ち合わせも学生、カメラマンも、会場設営も全て学生が中心です。

では、これまで燦の取組として実施してきた「『京産共創』プロジェクト」、「京都産業大学にとって白熱教室とは？」の説明に移ります。各イベントの参加者数は、このようになっております。毎回 100 名前後の学生・教員・職員の方にご参加頂いています。

「『京産共創』プロジェクト」とは、先に述べました「大学共創」というスローガンを実現させていくための根幹となるプロジェクトになるように、私たちが位置付けているものです。「『京産共創』プロジェクト」は、2011 年に第一弾を、2012 年に第二弾をどちらも 12 月に開催しております。このイベントには、第一弾、第二弾共、本学の藤岡学長にも参加していただきました。第一弾では、初めてのイベントということもあり、大学に対する様々な意見を頂きました。ここで発散された意見を集約・分析した後、さらに、その意見から焦点を絞って開催されたのが第二弾です。第二弾の開催によって、大学教育につながる具体的かつ、ユニークな意見を集めることが出来ました。このプロジェクトは、学生・教員・職員の方々が立場を超えて意見交換できる場であり、三者が協力した結果によって、より良い大学を創造していく契機になるという点で意義があると思います。

また「京都産業大学にとって白熱教室とは？」と題したイベントを 2012 年 6 月に開催しております。こちらのイベントでは、ハーバード大学マイケル・サンデル教授の白熱教室を題材に、京都産業大学の授業について学生・教員・職員が立場を超えて意見交換を行ったものです。「『京産共創』プロジェクト」と比べると、こちらの方がより授業改善に特化した内容になっています。

これらのイベントで集約・分析したデータをまとめた『共創データブック』を、この後のグループワークの時に配布しますので、是非ご覧ください。この『共創データブック』には仕上げるまでに 3 日間徹夜したという伝説もあります。また、イベントの詳細については FD フォーラムの期間中、燦のメンバーにも気軽に声を掛けてください。では、ここからは森廣さんをお願いします。

学生 FD スタッフ：森廣 続きまして、京都産業大学文化学部国際文化学科 3 年次の森廣 晋也がお伝えしていきたいと思います。

ここからは、京都産業大学の学生 FD 活動の特色をお伝えしていきたいと思います。

燦では、メンバーのファシリテーション能力の育成に重点を置いています。本学のキャリア教育研究開発センター「F 工房」の協力を得、合宿、研修会、模擬しゃべり場の繰り返しにより、燦主催のイベントで参加者間の議論が円滑に進むよう、メンバー内のファシリテーション能力向上に努めています。

また、私たち燦は、「ただのイベント屋ではない」ということで、イベントの実施のみならず、イベント後の振り返りにも重点を置いています。スライドにもありますように、運営者向けの「ファシリテーションシート」、参加者向けの「共創シート」と呼ばれるアンケートを利用して、振り返りをしっかりと行っております。

最後に、私たちがスローガンに掲げている「大学共創」を学内に広げるために取り組んでいる、知名度向上に向けての企画を紹介させていただきます。私たちは、「学生 FD＝堅苦しい」というイメージを払拭すべく、オリジナルマスコットキャラクター「SUN ちゃん」を制作・発信しております。様々なイベント告知に「SUN ちゃん」を使うことによって、私たちの組織が、学内の他団体と変わらぬ親しみ易さを持っているのだという意味でこのように紹介しております。また、公式ホームページ、Twitter、YouTube の動画配信チャンネル「燦 .ch」(燦ちゃんねる)等から、多角的に広報活動を行っております。

今後、私たち燦は、本学について語り合えるよい「場」と「機会」をイベントとして企画し、提供してきたことに加え、イベントの成果をフィードバックし、大学改善のビジョンの共有と、第三者が参画したいと思えるような仕掛けづくりに尽力し、「共創」の輪を広げていきたいと思っています。

悪役学生(元学生 FD スタッフ)：岩倉 おい。お前たちのプレゼンはこれでもう終わりか? いいことばかり言いやがって。もっと学生 FD の現実を話せよ。

ブルー：吉氷 何だお前は! プレゼンの邪魔をするな!

～BGM とともに燦レンジャー登場～

ナレーション 燦の命を受け誕生した燦レンジャー!

レッド：林 昇る太陽は燦の煌き! 燦レッド!

ブルー：吉氷 青い地球と京産を守るため! 燦ブルー!

ピンク：乙倉 燦に変わってお仕置きよ! 燦ピンク!

燦レンジャー 3人揃って、FD 戦隊燦レンジャー!!

レッド：林 俺たち燦レンジャーが来たからには、もうお前を好き勝手には言わせないぞ!

悪役学生：岩倉 好き勝手に言わせないだと? こんなきれいごとばかり並べているけどなあ、本当にお前たちそれをできるのかよ?!

ブルー：吉氷 そんなこと答えるまでもない。俺たちは必ず成し遂げる!

悪役学生：岩倉 本当かよ。俺は今まで学生 FD の醜い部分を見せつけられてきた。教員・職員の手足に成り下がり、想像力を失っている学生や団体がある。一部の大学が大きな顔をして、馴れ合っている姿も見受けられる。サミットでも、変化に乏しい同じような企画の繰り返し。参加する教職員も同じ面子ばかり。

確かに学生 FD は広がっているかもしれないが、規模の拡大に比べて、質の向上が追いついていないのが現実ではないのか。

ピンク：乙倉 確かにそういう見方もできるかもしれない。

悪役学生：岩倉 それに、このような学生 FD そのものが抱えている問題を、サミットやこのような公の場で議論するようなことは一切見受けられない。もしくは、このような違和感に誰も気付いていない。

ブルー：吉氷 そんなことはない。少なくとも俺たちはそう感じている。

悪役学生：岩倉 そうか。だがな、お前たちだけがそう感じていても意味がない。このままでは、いずれ学生 FD は衰退するのが目に見えている。お前たちも、いずれその波に飲み込まれることになるだろう。本当にそんなことでいいのか?

レッド：林 そうか…。学生FDには、華々しくきれいな部分だけではなく、いろいろな問題があるということ、もっと沢山の人々に考えてもらう必要があるな。君のような、勇気を持って真実を話してくれる人が俺たち燦には必要なのだ。一緒に戦っていこう！

悪役学生：岩倉 いや、俺はもう昔のあの頃には戻れないよ。

レッド：林 いや、そんなことは無い。俺たちにはお前が必要なのだ。

悪役学生：岩倉 今、お前たちを見て思い出したよ。結成当初、何もかもが楽しかったあの頃を。どんなにくだらなばかげたことにも、真剣に向き合っていたあの頃を。

～BGMとともに、レッドと悪役学生が抱き合う～

レッド：林 燦も常にそういった問題に頭を悩ましてきたんだ。だからこそ、燦は「大学共創」の輪を更に広げていきたい！だからこそ、燦は一步先、二歩先を考える団体でありたい！

ピンク：乙倉 皆さんのFD活動でもこのように感じたことはありますか？私たちと一緒に考えませんか？

レッド：林 燦レンジャーが力になりますよ。あなたの大学にも是非、燦レンジャーを！

森廣 誰もが憧れる自由。大学は自由に満ちた空間であると思います。その自由が与えられた4年間。自己判断に任せられた4年間。そんな大学生活で、したかったことは何ですか。各々のしたい学生生活を思い描き、皆がたどり着いたのが「学生FDスタッフ燦」でした。

現在、学生による教育改善活動は、京都産業大学だけではなく、日本全国の大学に広がりを見せており、同時に多くの人々の関心を集めつつあります。問題意識を持った様々な方が集い、多様な視点から課題解決に取り組むことができれば、一見難しいと思われる授業改善さらには大学の改善も少しずつ進んでいくと信じています。

目的が漠然としているかもしれませんが、これから「京都産業大学の為に何かしたい」と想いを抱いている、より多くの学生、教員、職員の方により燦の存在を知ってもらい、学生として私たちにできることについて模索し

ていきたいと思います。

我々の目的は、京都産業大学を構成するものすべて、また全国の大学を構成するものすべてを「笑顔にすること」です。

～映像”Think Different”～

耳野 ありがとうございます。皆さんいかがでしたでしょうか。学生FDについてはじめてご覧になられた方も少ないと思いますが、いずれも、大変魅力的な活動と学生さんばかりだったとお分かりいただけたかと思います。それでは休憩をはさみまして、「しゃべり場」へ移りたいと思います。皆さんよろしく願いいたします。

〔以下、参加者は10グループに分かれて学生FDスタッフとのグループ討議(「しゃべり場」)を実施した。グループ討議終了後、参加者は再び全体会場へ集合し、全体報告をおこなった。〕

○グループ討議の報告

耳野 それでは、ここからは各グループの報告の時間へと入ります。10のグループそれぞれにつきまして、ファシリテーターの方々に「しゃべり場」で出た意見や皆さんの交流の様子についてご報告をいただきます。よろしく願いいたします。

A グループ：京都文教大学：遠藤央

時間が押していますので簡単に行いたいと思います。私たちのグループでは主にフロアの質問を受けて学生さんに答えて頂く形で進行了ました。フロアの所属する大学はやっぱりまだ学生を含んだFDというのはまだやられていないようで、いろいろな質問が出ました。まず自己紹介をしてもらってどういうきっかけで入ったかということに関して質問がありまして、それから他のスタッフの勧誘の仕方とか留学生との関係とかですね、それから費用の問題も、どのように負担されているのか。大学が出している所と自腹を切っている所と、そういうところもあってなかなか大変なのだなという風に思いました。まとめなのですが、本当にFDは実行されているのかということで、それに対して学生側から長期的視点で見て欲しいし、こちらもやっていると。それから活動はFDだけではない、授業改善だけではないのだというような応答がありました。それからやはり人が大事で、まとめ役となる人が職員なのか学生なのか教員なのか、という

ところが活動のポイントになっているようです。それから教・職・学の交流の実現ということ。これはなかなか色々問題点があるようなので今後の課題だということです。それから大学は変わって行くのか。変わって行くとしたらどのように変わって行くのかというところで、やはり学生と教職員がどのような関係を保っていったらいいのか、ということが出ました。そういったことでまだまだ課題が沢山あるのだなということで交流を終えました。以上です。ありがとうございました。

B グループ：京都学園大学：尾崎タイヨ

B グループです。学生のスタッフの方が大変生き生きとやっていただきましてどうもありがとうございました。結論から言いますと、学生さんの印象では教育に直接影響を与えているという実感はほとんどないのだということです。学生が実行実現して成長できている場、そういう場としての認識が非常に強くてそれが学生 FD の非常に大きな魅力になっているということです。私たちの立場から考えてみても、結局教授法の改善云々というのは学生をいかにアクティベートするかということですので、結局のところそういう風にそこで学生が生き生きしてくれれば目的は達したというべきだと思います。学生もそんな認識でいるということです。それから学生の声をもとめる場になっていると、声が大きくなれば一番変わりにくい教員も変わらざるを得ないだろうというような感想を漏らしていた学生さんもいます。また、学校の或いは教職員の立場からしてみますと、やはり学生を活性化していく重要な方法の一つという感じもいたします。こういったところが簡単ではありますがまとめてございます。どうもありがとうございました。

C グループ：同支社大学：坂井岳夫

では報告をさせていただきます。フロアの複数の方が持っていた関心としまして、学生が FD に参加するに至った個人的な動機である、大学への不満あるいは学生 FD グループへの関心などが、それぞれ教学の改善という FD の本来の目的に結び付いているのかという質問がありました。これは、重要で本質的な問題提起ですが、学生にとってはおそらく難しい質問だったのではないかと思います。このような質問に対しまして、学生の皆さんは、現在の活動内容あるいは今後の抱負という形で、次のように答えてくれました。第 1 に、確かに教育の在り方を変えるのは難しいが、だからこそ、まずは大学を知るところから始めようとか、あるいは、大学について考えようというスタンスで自分たちは活動に取り組んでいるのだといった回答がありました。また、今後の抱負とし

て、自分たちの成長だけではなく、学生 FD の成果も求めていきたいという回答もありました。第 2 に、学生として FD 活動に関わることでできる 4 年間でどこまでやれるかと問われると、確かに自分には分からないことがあるし、もしかしたら限界があるのかもしれないが、そのような意味では、新入生への引き継ぎといったことも学生 FD の大事な活動だろうといった指摘もありました。また、今後の抱負として、次の世代への期待ということをお口に学生さんもおられました。第 3 に、教職員の活動に学生 FD の活動が具体的にどのようにつながっているのかということについて、例えば、教育研究所あるいは教育支援研究開発センターという大学組織と学生 FD とのつながりがあり、そういった部署に学生が頻繁に立ち寄れるような配慮を行っているという回答がございました。また、この点におそらく関連すると思うのですが、学生さんから、教職員も自分の大学をもっと好きになってほしいという抱負あるいは希望が挙げられていたのが印象的でした。このような形で、非常に難しいかなと思ったフロアからの質問に対して、学生たちはしっかりと問題点を把握したうえで、楽観しているのではなく、こつこつとやれることから、そしてしっかりと先への展望を持って考えているのだという印象を受けました。以上になります。

D グループ：京都ノートルダム女子大学：廣瀬直哉

はい、D グループです。実は僕的能力不足でまとめるということが出来なかったのですが、本当に感想として言わせて頂きたいと思います。本当に学生さんがすごく成長されているのかそういうことを実感しました。それで僕自身ですね学生の側に座って皆さんのフロアからの質問であるとか意見であるとかを見ていたのですが、その時に学生を見る教職員の目という温かい目というのをすごく感じました。やはり私たち教職員が温かい目で学生に対して支援していける、そういう学生を育てていけるということが非常に重要だという風に思いました。すみません感想ですけど短い発表で終わらせて頂きます。

E グループ：京都教育大学：村田利裕

グループワークショップ E 担当の京都教育大の村田です。どうぞよろしくお願い致します。私も実は貴重な体験をさせて頂きましたが学生さんのスタッフさんのお話をまずお伺いいたしました。特に 4 つの丸を設けましたが、自分たちの大学で何ができるのか何が学べるのか、やはり根本的な視点に立つてご発言頂いたのかなと思います。

ます。それから大学の授業をどう受けていいのかわからないと。なるほど我々こう受けて下さいねと教職の説明もしているはず、受講の説明もしているはずなのですがこう受けていいというそういう方向性を示したことはなかったなと。どちらかといえば学生の受け方が悪いのだと、そういった立場でやっていたことがあったのではないかと。次に学生は大学の授業に要望できない。こんな授業が欲しいとか、あんなことが学んでみたいというようなことが提案できないと、非常にダイレクトな問題を語っていただきました。それを一口にピカピカの星を書いておきましたが、大学創設の世界観に学生さんは接しておられるのではないかと。我々教師はどちらかというと辞意体制で就職するのですが、しかし本格的に大学教育がどうあるべきかというところの問題に接近しているのではないかと。そんなことが星のピカピカで表せて頂きました。ですから学生さんから大学の授業をこうあってほしいとこんなことをやってほしいと、特に最初の会場のところからご案内がございましたがFD研修会で学生さんが講師になられるというような体験もなさったようで、FD研修会とは偉い先生方をお呼びするような企画でございますので、非常に反省が、私個人の問題かもしれませんが反省が多かったと思います。それから4つ目ですがFD活動というのは大学の教授法改善だけでいいのかどうか、こういうことがやはり言っているように思います。つまり今回のこのテーマから言いますと第一会場に第二会場から大きな石を投げるといって感じでしょうか。大学教育の何かの効率化のような効果を我々狙ってきたのではないかと、決してこれは私の意見ではなく学生さんがおっしゃったので、第二会場の先生方また面白い話になったなとは思っております。それがスタートラインでございました。会場にご参加いただいた先生方から教・職・学、三者の立場がどうなっているのかご質問がありまして、やはりさまざまなことが盛り込まれたわけですが、キーパーソンになられる先生が必要な現状、そのようなこともありますし、それから職員の方その方が重要なことだというようなこともありました。しかし自分たちの取り組みが重要ということもありますし、自治会との連動性というようなことで本当に学生の歩みの中からこういった回答もありました。活動の継続性ですが学生さんの回答としましては、実態としましてはアクターが、非常に活力のある方々が大学は次々に現れるのだと。我々教職員はどうしてもある組織がと言いたいところですが、非常に活力がある方が次々に現れるというような視点を教えて頂いたように思います。それから自由度はどうかと、学生さんが教員や職員の方と結びつくとうとうともある程度の足

かせがあると、いうご質問だったと思いますが実はそういう側面の感想もありましたけれどももう一つ自分たちの活動が数千人の大きな学生さんへの貢献につながっていないというもどかしさと言いますか、FD活動しているのに大きな大学の変革に繋がっていかない。実はこれは不自由な事なのだと、というような二つの立場で自由度は語られました。ですので、アクターがいる、個が輝く、学生さんが輝くときに実力としての組織が現れるのだと、等々のことがありました。その背景としまして最後に実は、最後のところで忽然とはつきり表れたのですがFDは教員がやるものとその意識が学内に非常に根深いのだと。それが実は乗り越えられない大きな障害になっているのだと、ということがご参加の教職員の先生方からのご指摘がありました。しかし最後に是非やってみたい、担当してみたいというような感想を頂きました。以上です。

Fグループ：京都外国語大学：畑田彩

グループワークFです。京都外大の畑田が報告いたします。まず私どものグループでは質問が非常に多く出しました。例えば登録者の数は沢山いるようですが実働部隊の数はどうかという質問に対しては、例えばテスト期間ですとか、あるいはほかの活動、サークルなどの活動の兼ね合いによってまちまちであって、実は会合を開いても一部の学生しか集まらない現状があるとお話を頂きました。それからスペースや予算に関して、特にスペースに関しては最初からあったわけではないという大学。それからあるにはあるのだが、時間で借りるだけで常設化されているわけではないということが4つの大学に共通で、ソフト面、そういったスペースが不十分であるというのは学生FDが展開されない理由にはならないのではないかと印象を受けました。それから4つの大学の中では産大さんが非常に人数は多いのだけでも、それがなぜ集まったのかというのはもちろん大学の規模もあるのですがセンターによるサポートがあって非常に活動しやすかったという意見がありました。続いてFDによってどんな効果があったのかという質問がありました。他大学とのネットワークが広がり交流ができたであるとか、自分が変わったので、今後は自分が変わることによって周りを変えて行きたいという個人に的を絞った意見や、学生がFDの視点を持つようになった。例えば学生FDのところにはほかの学生が、あの先生の授業はつまらないということを言っていたのが、それがどこがつまなくて、なぜつまらないのかということと言えるようになってきたという意見がありました。それから学内でのFDの認知度が上がっているという意見もありました。そのような意見を踏まえましてFDの活かし方

に関しましては三つの意見が出ました。一つは軋轢をさける方法での授業評価を学生にしてもらいたいという事です。追手門さんでは悪い授業ではなく良い授業をしている先生を表彰する形でその点をうまくやっているという意見がありました。それからオープンキャンパスとのリンクです。FDが大学の魅力を発掘する活動であるならば、それをオープンキャンパスとリンクさせて大学の魅力を効果的に伝えることができるのではないかという意見もありました。それから最後に教職員との意見交換の場を設けられるといいという意見もありました。最後にFDがまだ自分の大学では展開されていないという先生からの意見として、どの大学でもやられている授業評価アンケートに関してですが、学生の希望を取り入れて項目を多くすればするほど分析が非常に煩雑になる。結果学生の意見を一見聞いたように思えても分析結果というフィードバックができていない。それよりは学生が直接こういった点を授業で改善してほしいというやり取りがあった方がずっと生産的ではないかという意見がありました。以上です。

G グループ：京都産業大学：耳野健二

次ましてグループGを担当しました京都産業大学の耳野です。いろいろな話題が出ましたが、まず印象的だったのは、学生FDスタッフの活動を通じて、学生さんたちご自身が自らの成長を実感しており、ここに活動の魅力を感じている、ということです。「今まで人前で話すことが苦手だったけれども、イベントなどで司会をすることで経験を積んで自信ができた」「大学職員さんの気持ちがわかったり、先生に対して非常に興味が出てきて授業に対する姿勢が積極的になった、たとえば前の方で授業を受けるようになった」といった意見がありました。

他方で、活動のためのモチベーションをどうやって維持するのか、という問題も提起されました。これに対して学生スタッフの側からは、「活動が続けるためには自分も楽しくやらなければいけないと考えている」「真面目なことを楽しくやるということが継続する秘訣になるのではないか」というお話がありました。

さらにまた、学生FDの組織化あるいは制度的な位置づけの問題も出てまいりました。ここはなかなか悩ましいところだと思いますが、直接授業改善に繋がるような学生FDの活動がどこまでできているのかというと、われわれのグループで話した限りでは、今のところははっきりとした成果は見えていないように感じました。ただし、学長・理事長をまじえた「しゃべり場」の開催のような興味深い取組も紹介されました。

また、活動内容それ自体を、大学からの依頼によって、たとえば「オープンキャンパスでこれこれをやってください」というような形で、決めているのかどうか。さらにはそうした事情と、自分たちがやりたいこととの葛藤をどう解決するのか。こうした質問も出たのですが、これは大学によって個性があるようです。大学からの依頼でオープンキャンパスでこれをやりますという決め方をしていて、代々先輩がそれをやってきたからそれをさらに良くしていきたいと考えておられる大学もあります。また、私たちは企画から全部自分たちでやっています、大学のサポートはあるにしても、やっぱりやりたいことを自分たちで作り上げるところに意味がある、と考えておられる大学もありました。

また「学生FDに関わって大学に対するイメージが良くなったか」という質問に対しては、肯定的な意見が多く出ました。たとえば、「FDをはじめから、大学職員になりたいと思うようになった。」「以前は職員を敵視していたが、職員の気持ちや大学のことが理解できるようになった」といった意見です。

最後に、今後の抱負については、「学生FDの認知度をもっと高めたい」「大学改善のため、後輩を育てて自分の経験を伝えたい」といった意見が出ました。

一時間弱、学生スタッフの皆さんのお話をいろいろ聞いていまして、皆さん大変しっかりしておられて非常に感心しました。どの学生さんも、初めてお会いする全国の教職員の皆さんを前にしっかりと自分の意見を理路整然と、時にはユーモアを交えて仰って下さいました。学生FDというものは、本当に学生を成長させるものなのだと改めて実感したところです。ただ、そういった学生FDの活動が大学の教学システムや教職員の意識改革にどう繋がっていくかは、まだ未知数といわざるをえず、どの大学でも苦労して模索しておられる様子でした。以上です。

H グループ：京都文教大学：村山孝道

京都文教大学の村山です。H班の発表をさせて頂きたいと思います。我々の班では、4人の学生さんに一人一人にキーワードをA4の用紙に書いていただきましたので、それを紡ぎながら再現をしていきたいと思います。

最初に、学生が自己紹介と活動の概要を紹介しましたが、これが長い。話がうまい、とかではなく、とにかく話す内容がいっぱいあるのだなあということを感じました。皆さんの班でもそういう風に感じられたのではないのでしょうか？

質問では予想していたとおり、お金の話が出てきました。大学がやるべきことを学生さんがやった場合は報

酬を払うべきではないか、というようなお話です。これに対して学生さんからはお金よりむしろ「やりたいことを実現したい」、とお答えされていました。学校が提供できるものと学生が実現したいことが一致すれば対価は発生しない、お金ではない別の価値を大学は学生に提供できることがある、という事だと思います。それと学生さんが学生 FD の魅力について報告されました。いろいろありましたが、例えば「世界が広がる」というものです。学生 FD サミットなんかもそうだと思いますが、外とつながる、あるいは「他流試合」ができるということが魅力であるということです。あるいは、「もはやありすぎて書けません」というような人もいらっしゃいました。

その次にこれも予想通りですが、「実際に学生 FD が授業は変わるのですか？」というような質問です。ごもつともな質問です。これについては、学生さんは授業改善の実感が全くないというような印象で、貢献していないというような雰囲気でした。ただ、私の感想としてはそんなことはありませんので補足として報告します。例えば、ファシリテーションの研修を丸二日やって、それが終わったら学生が事務所に来まして、「聞いてくださいよ。ゼミで先生が前提を揃えてくれなかったのずっと空中戦でした」とか、「議論の拡散ばかりで終息してくれなかった。」とか学生が言います。このように学生一人一人が変われば授業は変わっていくのだな、と私は思っています。学生さんはあまり気づいていないようですが、私は確実に授業を変える力になっていると思います。

次に、「FD イベントをやってもあんまり人が集まらない」とか、「先生向けの研修も結局あんまりこないじゃないですか」というご意見です。「集まる人はいつも同じ、少数の人による自己満足ではありませんか？」というような問いです。これは広げる努力をしないといけないと思います。勝手には人は集まりませんので「取に行く」とか、「集めきる」というような執念が必要だと思います。ここは学生さんが自信をもっていろんな報告をしてくれました。

最後に、この会場にいらっしゃる 8 割ぐらいの大学に学生 FD がまだないという風にお聞きしております。グループの中でもご提案をしたのですが、どの大学も教員向けの FD の講演は年に 1 回か 2 回はされていると思います。そのうちの 1 回ぐらいを学生と一緒にやってみる、というのはどうでしょう？全く新しいものを作る、というのは大変です。既存のもののやり方を変えてみる、というのが最初は入り易いのではないかという風に思います。以上です。

I グループ：追手門学院大学：梅村修

I 班の発表です。追手門学院大学の梅村です。30 人

の先生方が集まると思っていたら、なぜか 17 名しか集まりませんでした。学生 FD 活動に恐れをなされたのかもしれませんが（笑）、「これはしめた」と思ってちょっと捻破りなやり方でやりました。木野先生と耳野先生に怒られるかもしれません。

私はこの 17 名の先生を 4 つのグループに分けました。そして学生 FD スタッフを、その 4 グループに配置しました。そして疑似しゃべり場を体験してもらいました。その前にアイスブレイクも行いました。つまりサミットというものの高揚感や一体感を疑似体験していただこうと思ったのです。学生 FD スタッフを交えて、ご自身の大学の FD 活動に学生の視点を取り入れたらどうなるだろうか、また学生 FD 活動にはどんな期待ができるだろうか、そう言った事柄について、喧々囂々と話し合っていたいただいたわけです。

結論を申します。今回、我々このグループにおいても、またこのシンポジウム②においても、その目的としたことは、学生 FD 活動の魅力を皆様方お一人お一人に伝えるという事でした。この目的は十二分に達成されたと思います。と言いますのは、参加されたほとんどの先生方が非常に関心を持って下さった。興味深いと言って下さったからです。設置の形態はどうなのかとか、大学の支援のあり方はどうなのか、予算とかスペースの確保はどうか、学内の教職員や学生に対する PR はどうやっているのか、自主的な学生の意見をくみ取るような場づくりやイベントをどう行ったらいいのか、学生 FD 活動を牽引するコアの学生を見つけるのは大変難しいと思うがどうやっているのか……。こういった方法論的な質問が相次ぎました。

先生方との議論の中で、一番感銘を受けた言葉はこれでございます。

「学生全員が学生 FD をしたら幸せになれる」

グループの先生方は、学生 FD スタッフの学生を見て、その成長ぶり、その弁舌も含めた堂々とした態度、そういったものに大変、感銘を受けておられました。もし学生一人一人がこの学生 FD 活動に参画して自分を磨き上げれば、学生はきっと幸せになる。教職員も幸せになる。大学もハッピーになる。とかく、FD と言うと、義務や制約や評価がまわりついて重苦しい。FD なんかできればやりたくない、避けて通りたいと思ってしまいますが、学生の視点を取り入れることによって、FD はもっと伸びやかに、もっと楽しく、もっとイキイキとしたものになるのではないかと、以上でございます。ありがとうございます。

Jグループ：京都産業大学：山内尚子

グループJを担当させていただきました、京都産業大学学長室の山内と申します。どうぞよろしくお願い致します。グループJ(参加者：約20名)では、9割の大学が学生FDを行っていないとのことでした。そこで、グループ討議の時間では、2つの問いについて、ペアワークと全体共有の時間を取りました。

まず1つ目の問いとして、「シンポジウム②(学生とともに進めるFD)を選んだ理由と期待すること」についてお伺いしました。「そもそも学生FDがどういったものか聞きたかった」、「学生FDを始めてみたいが、どういうきっかけで始められたのか知りたい」、「教職員の抱けと学生との関係性をどうやってより良くしていったらいいのかを日頃から悩んでいるので、その解決策が見いだせないか」等といった動機で、シンポジウム②にお越しいただいたようです。

次に2つ目の問いとして、「大学のFDに学生を参画させること自体に効果があるとお考えなのか、効果があまり期待できないとお考えなのか」をお伺いしました。

大半は「効果があるのではないか」といったご意見でした。活動報告の中にもありました通り、教職員だけでやってい「FDの閉塞感」を打破するという意味では、学生の視点を取り入れることで、新たな科目の開講や、授業手法の改革につながり、非常に効果があったというご意見がありました。そして、学生からは、先生のことや職員の仕事ぶりを、学生FDに関わることで知れるようになったことが、自分たちにとっても良かったという意見もありました。そういった教職員間、教職員—学生間のコミュニケーションの促進につながるという意味では、学生FDを取り入れることの効果が期待できるという意見がありました。

一方で、「学生を取り入れる上での課題」として2点挙がりました。大学に、教・職の抱けに学生を取り入れて「教・職・学が一体になろうという風土」がないと、なかなか大学改革や授業改革に繋がっていかないのではないかといった意見もありました。そして、大学の中での「学生FDの位置づけ」を明示しておかないと、FDは義務化されている一方で、学生には自主性を求めている。この辺りで矛盾が出てくるのではないかとという意見もありました。

こういった意見を踏まえて、「今後の学生FDに期待できること」として、最後に3点にまとめさせて頂いております。

まず1点目は、学生は4年間で自動的に卒業してしまうため、入れ替わりが生じます。「しゃべり場」や、サミット、研修会等といったあらゆる学生FDの活動を通

して、様々なアイデアやデータが収集・蓄積されていきます。その収集・蓄積されたデータを、学生自身が活用していくというよりも、既存の教職員が効果的に大学改革に繋げていこうとしないと、学生FDを取り入れるメリットがないのではないかとという意見がありました。

2点目は、各大学で、カリキュラム改革や学部改組を進めておられると思います。しかし、その検討段階で、学生の意見を取り入れている大学は少ないのではないのでしょうか。そういう時に、教職員の中から「学生の意見を1度聞いてみよう」と言える風土がないと、なかなか大学改革に繋がらないのではないかとという意見がありました。

最後に、FDは義務化されているので、我々教職員にとってはどうしても「やらなければならない『業務』」になってしまっています。しかし、学生たちの発表を見て頂いておわかりいただいたかと思いますが、学生たちは、非常にイキイキとして、楽しそうで、自分たちから進んでやりたいという思いで活動しています。そういった、学生たちの「FDを楽しもう!とする姿勢」を、教職員は見習わないといけないのではないかとということです。教職員がFDを楽しむきっかけの一つとして、学生を取り入れながらうまく一緒に活動していくということが、今後学生FDを発展、維持、向上させていくためには必要ではないかという結論に至りました。以上です。ありがとうございました。

耳野 ファシリテーターの先生方ありがとうございました。それでは最後に、基調講演をしてくださった木野先生に総括コメントを頂戴したいと思います。木野先生宜しくお願い致します。

木野 各グループのご報告をお聞きしてすぐにまとめるというわけにはとてもいきませんが、どのグループも結構学生の声を受け止めて頂いたように思います。私は村田先生の部屋に伺いましたけども、参加者の先生方の非常に温かい目を感じましたし、先生方の中からは今度ぜひサミットに学生が行くようにしますというようなお話もあつて目を見張りました。

ところで、この学生FDというのはよく学生参画というのと一緒にされたり、あるいはピアサポーターともごっちゃにされるのですが、私は一貫して学生主体型のFDと言っています、というか強調しています。先ほどの報告の中でも村山さんが言われたように、学生がやらされるではなくやりたいということが第一、まさにこれだと思うのです。参画型というのは大学が中心に立って学生を呼び込むイメージですけども、学生FDというのは学生が自由にのびのびと自分たちが何をやりたいのか、ど

ういう教育を受けたいのかというのが基本だと思うわけです。

それから学生 FD が他の学生たちの活動、例えば自治会とかピアサポーターとかとごっちゃになってきているのではという声もあるかと思いますが、学生 FD 活動の基本は大学教育を自分たちのために良くしようということです。もちろん、学生にとっては授業だけでなく、4 年間の大学生活にかかわる教育上の問題もすべて対象になりますから、自治会やピアサポーターの活動と重なるところはあります。しかし、学生 FD 活動の軸は大学教育を良くしたいという学生の主体的な取り組みですから、自治会やピアサポーターから始まったとしても、いずれ独立した学生 FD の活動に進むのではないかと私は思っています。

最後に、せっかく参加されてグループワークをやっていたいただきましたので、その結果どうなのかを少しお聞きしたいと思います。

まずはこの第二シンポジウムの参加者名簿を拝見しますと、学生 FD がまだないという大学の方々は 7 割～8 割ぐらいかと思いますが、今日の参加者の中で自大学に学生 FD があることを知っているという方々はお手を挙げてください。(挙手わずか)

そうですか、拝見したところ、教職員の方々のうち、身近に知らないという方々は 8 割というよりは 9 割ぐらいですかね。でも、今日のシンポジウムを通して学生 FD というのが一応おぼろげながらも何をしているのかはわかっていただけたと思います。実際の学生の生の声も目の前でお聞きになったと思います。それでは、そういう学生 FD なら良いなと思った方はお手を挙げてください。(挙手多数) ありがとうございます。では学生 FD は何をしているのかわからないと思った方は手を挙げてください。こういう質問では挙げにくいですね(笑)。では今日のシンポジウムを通して、これから自分の大学でもこんな学生の人をまわりに集めたいな、あるいは今日の学生さんたちに一度来てほしいなとか、学生 FD についてちょっとでも自分の大学でも考えてみようかなと思われた方はお手を挙げてください。(挙手ほとんど) 私の予想以上に多かったのうれしいです。ありがとうございます。

先ほどのグループ討議の報告のなかで、村田先生の E グループですかね、第二会場から第一会場に大きな石を投げる感じだと学生が言ったという話ですが、私は石というのは FD のパラダイムシフトの別の視点という意味だと思います。今まであまり語られなかった、そういう意味での石ということで、悪い意味での石を投げたのではないと思います。ぜひ、この石を共存、共有しなが

ら、今後の大学 FD 全体を進めていきたいと思っております。以上です。どうもありがとうございました。

耳野 皆さん長時間に渡りお付き合いいただき、ありがとうございました。シンポジウム②「学生と共に進める FD」、これですべてのプログラムが終了いたしました。是非今後とも学生 FD に付きましてご支援ご理解を賜りますますこの輪が広がっていくことを願っております。

*以下は、当日シンポジウムに参加して下さった学生 FD スタッフ、FSD プロジェクトメンバーの皆さんである。

立命館大学		追手門学院大学	
回生	氏名	回生	氏名
2	岩佐 香織	4	有光 潤
1	加藤 雄一郎	4	梅原 紀
3	田中 翔	4	久川 尚恵
3	伝保 香織	4	播本 奈々
3	澤田 亮	4	山下 貴弘
3	松本 慎平	3	三上 雄輔
2	森本 拓暢	2	清水 菜未
2	杉野 友哉	2	田崎 優里
院 1	竹中 悠	2	玉水 克明
		1	上西 玄
		1	小森 将幸
		1	森田 諒亮

京都文教大学		京都産業大学	
回生	氏名	回生	氏名
3	山田 博貴	4	岩倉 一憲
3	中村 侑貴	3	伊藤 琴音
2	瀬川 綾乃	3	林 隆二
2	真島 ちさと	3	森廣 晋也
1	高橋 知之	2	乙倉 孝臣
1	飯田 雅穂	2	清水 基弘
1	森下 舞美	2	高島 琢也
1	伊藤 龍治	1	神津 茜音
1	井上 和行	1	竹谷 美里
1	水谷 香菜	1	吉水 康矢
1	上澤 尚実	1	若宮 健

2013.2.23. 第18回FDフォーラム シンポジウム②

学生とともにすすめるFD

立命館大学 共通教育推進機構
木野 茂

1

日本の大学のFD

- 1991年の大学設置基準改正「大綱化」
欧米より20年遅れのFD開始
- 1998年「FDの努力義務化」
- 2008年「FDの義務化」
中教審、大学教育の質的転換強調
- 2009年「学生FDサミット」開始

2

二つのパラダイム転換

- 学生とともに作る授業
一方向の知識伝授型から
学生とともに作る授業へ
- 学生とともに進めるFD
教職員のための取り組みから
学生とともに進めるFDへ

3

学生FDとは？

- 学生の視点から授業・教育・大学を良くしようとする学生による取り組みの総称
- 学生主体だが、目的を同じくする教職員との三位一体で進めることが目標
- 具体的な取り組みは、それぞれの大学に
適した取り組みに注力すればよい

4

学生FD活動の意義

- 学生の視点を大学のFDに反映
教職員だけのFDでは、授業や教育を受ける学生の視点は見えない。学生FD活動は大学のFDをバランス良く進展させる
- FD活動は学生自身を成長させる
授業や教育に受け身の姿勢から主体的能動的な姿勢に転換し、自らの成長を促す

5

学生FDの進展

- 第一期：学生参画型FD(2001年～)
国立大学のFDセンターによる取り組み
現在も続いているのは岡山大学のみ
- 第二期：学生主体型FD(2007年～)
立命館大学で学生FDスタッフ発足
学生主体で教職学三位一体の学生FDへ
山形大学との学生交流を契機に新展開

6

学生FDサミットの提案

- 他大学を知って自大学を知る
- 大学を良くしたい教職員とつながる
- 全国の大学とつながることで学生FDを発展させよう！



2008.12.20
山形大学との交流成果発表会で
立命館学生FDスタッフが提案

7

第1回学生FDサミット(2009夏)

大学を変える
学生が変える。

26大学100名

学生FDサミット2009夏を開催します。
学生と教員・職員が一緒に大学の問題について、教育について考える、
それが学生FDサミットです。立場を超えて、大学の壁を超えて、
グループワークや意見交換を通して、よりよい大学づくり・教育づくりを求めてみませんか。



最も人気のあったテーマは「学生・教員・
職員が協力して良い大学を作るには・・・」

第2回学生FDサミット(2010冬)

39大学180名



テーマは「各大学でどんな
学生FDができるか？」

9

第3回学生FDサミット(2010夏)

38大学210名

学生FDサミット
2010夏～大学を変える、学生が変わる～
8/28.29
in 立命館大学衣笠キャンパス 存心館

統一テーマ
「大学の教育の意義」



第4回学生FDサミット(2011夏)

～SUMMIT 2011Summer～
Student – Initiated Faculty Development

47大学
271名



- ①「どんな授業がいい？」
- ②「大学で何がしたい？」
- ③「課外活動って必要？」



11

第5回学生FDサミット (2012冬)

「あなたはどんな大学
に通いたいですか？」

教員が大切にしたい人間
としていられる。お互いに知識
や経験の多岐にわたって、できる
ことはいろいろ。

追手門学院大学
56大学
340名



12

第6回学生FDサミット(2012夏)



59大学427名

「学生にとっての
主体的な学びとは」

第7回学生FDサミット(2013春)

3月5日・6日
岡山大学にて

*岡山白熱教室
*岡山しゃべり場
「自大学に、より貢献する
学生FD活動をするには」
*FDタイムカプセル

14

いまや全国に広がった
学生FD活動は

15

各地でも広がる学生FDの交流

i*See(by岡山大学)
学生FD会議(byつばさ・山形大学)
学生FDのWA!!!!(by追手門・京都文教)
054time!!(by札幌大学)
関東圏FD学生フォーラム(by同学生連絡会)
関門サミット(byコンソ関門・下関市立大学)
大学間交流(立命・山形、立命・京産・・・)

16

学生FDのガイドブック刊行(2012.3)



学生FDとは何か？
学生FDの実践紹介
立命・岡山・法政・大阪・
追手門・京都文教・愛知教育

第2巻近日常行
追手門サミットの記録
第3巻予定
立命・岡山サミット記録

17

授業とFDの二つのパラダイム転換
を目指して

学生とともに作る授業、学生とともに進めるFD

ご清聴ありがとうございます。
ございました。



18

参考文献

- ・ ジョンソン他『学生参加型の大学授業』玉川大学、2001年。
- ・ 木野 茂『大学授業改善の手引きー双方向型授業への誘い』ナカニシヤ出版、2005年。
- ・ 木野 茂「教員と学生による双方向型授業ー多人数講義系授業のパラダイムの転換を求めて」『京都大学高等教育研究』15、2010年。
- ・ 木野 茂「学生とともに作る授業を求めてードキュメンタリー・環境と生命」『学生主体型授業の冒険』(小田・杉原編)ナカニシヤ出版、2010年。
- ・ 木野 茂「学生とともに作る授業、学生とともに進めるFD」『学生・職員と創る大学教育』(清水・橋本編)ナカニシヤ出版、2012年。
- ・ 木野茂編『大学を変える、学生が変わるー学生FDガイドブック』ナカニシヤ出版、2012年。

19

2013年度立命館学生FDについて

代表 加藤雄一郎

☆立命館大学学生FDの悩み

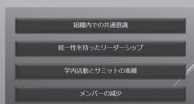
組織内での共通意識

統一性を持ったリーダーシップ

学内活動とサミットの乖離

メンバーの減少

- ・ 理念の設定
- ・ リーダーシップ、役割分担
- ・ 自分たちの活動の延長上にサミット運営を置く
- ・ 前向きな活動をアピール、広報強化での人数獲得



2013年夏 学生FDサミット

乞うご期待！！

2012夏サミット

8月25日・26日開催
参加者 430名(学生・教職員)



1日目の主なプログラム(8月25日)

- ・活動紹介ブース
⇒25団体の活動紹介を小教室で行った



- ・分科会
⇒学生FDに関する6つのテーマに分かれて、各分科会の登壇者の話を聞き交流を行った

2日目の主なプログラム(8月26日)

- ・しゃべり場&発表
⇒テーマ「学生の主体的な学びとは...」について
6〜7人グループで議論を行った



サミットの開催するにあたって...

分科会

活動
紹介
ブース

しゃべり場



前期の活動は夏サミットの準備で追われる

立命館の学生FDの問題点

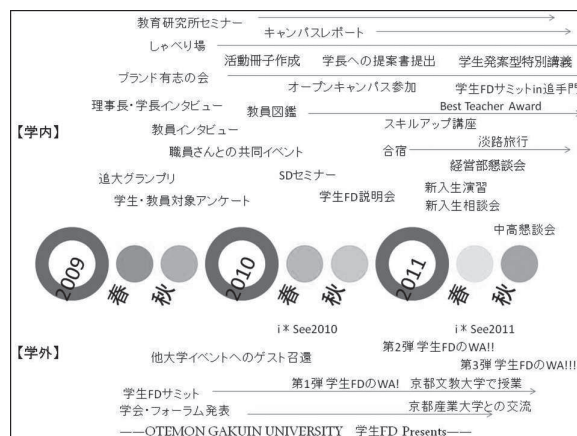
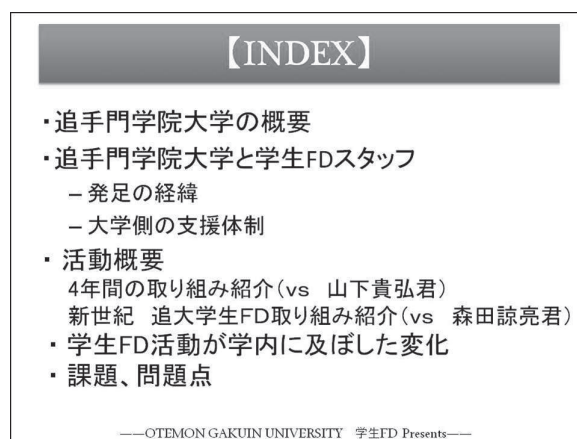
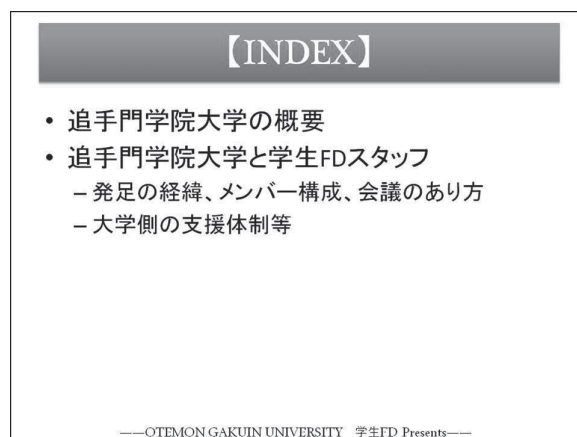
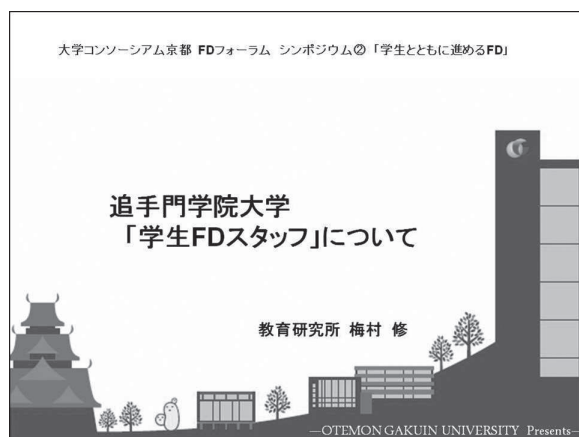
スタッフ人数が
少ない学生FDの
知名度が低い横のつながりが
希薄

5

The information of our activity -at Rits-

活動事例紹介-学内編-





【学生FDの特徴】

半学半学

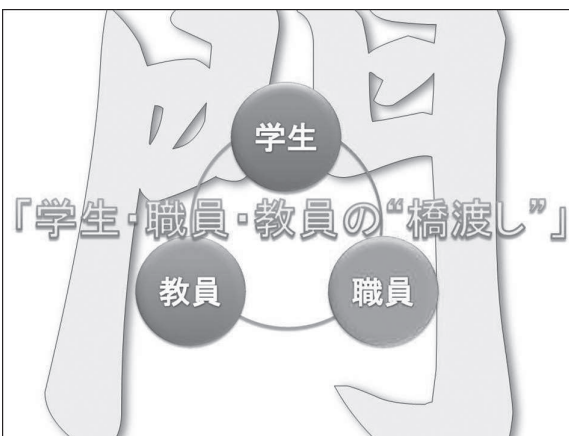


第1期：橋渡し前（混沌、混乱、迷走の時代）

Q.なぜ、学生FDへ参加したのか？

第2期：橋渡し後（飛躍期）

Q.どんな心境の変化があったのか？



**Q.意識調査としゃべり場で
気付いたことは？**

Q.しゃべり場の心得とは？

“教員図鑑”

[illegible]

Q. やってみた感想は？

[illegible]

激震 サミット開催決定!!

第3期:サミット前(結末期)

Q.サミット主催、どう思った？

**“学生発案型
特別講義”**

恋愛についての気になる
あんな事やこんな事、
止まらぬに至るまで
知りたくなませんか？

学生FDプレゼンツ
学生発案型特別講義第1弾

これからの
の話をしよう

10月11日(木) 18:00-19:00
会場：学生FD会館 101号室
講師：学生FD会館 101号室
入場料：無料
申込：学生FD会館 101号室
お問い合わせ：学生FD会館 101号室

恋愛についてのアレコレ
恋の恋愛感わかる！

QRコード



Q.学生FDのWA！の特色は？



転換期を迎えた
追大学生FD

燃え尽きたのか!?

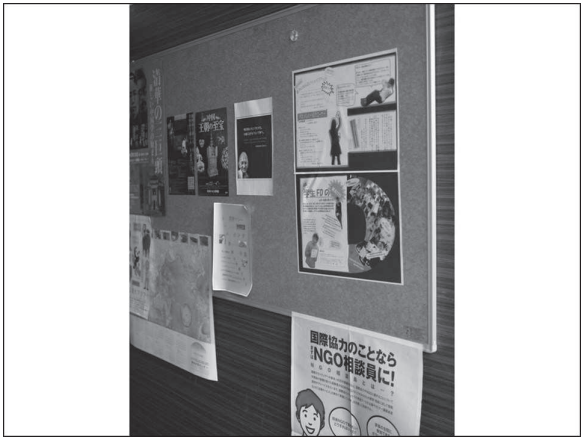
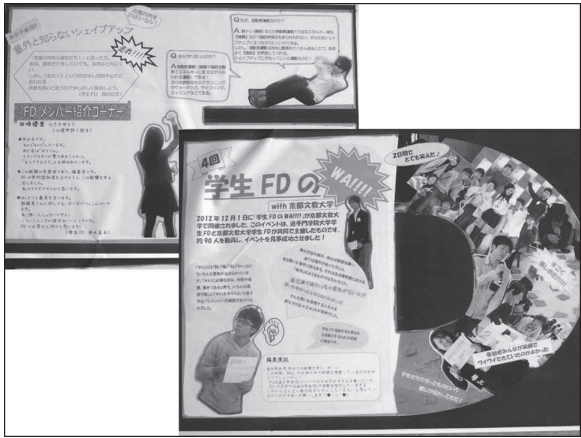
追大学生FD

99

教育研究所 セミナー 学長・理事長との対話集会



学生FD新聞 どんな活動をしているか + どんな人が活動しているのか



【学生FD活動が学内に及ぼした変化】

- ①会議や研修の在り方が抜本的に見直された。
- ②教職員と学生との協働、教職員が学生を称揚、支援する活動、学生の視点や意見を尊重する活動が目立って増えてきた。
- ③「教育開発センター」が独立…規定に「学生FD活動の支援」が明記
- ④自分の大学を好きになる学生が増えた。

【課 題】

- ①組織のサステナビリティ
- ②会議のあり方や人間関係、仲間づくり
- ③イベントの高揚感や個人の成長にとどまりがち
- ④やっぱりFDは教員の仕事



第18回FDフォーラム
学生が主体的に学ぶ力を身につけるには
シンポジウム②「学生とともにすすめるFD」

「有志・草の根FSDプロジェクト」

2013年2月23日(土)
於：立命館大学

京都文教大学
職員 村山 孝道
学生 中村 侑貴

自己紹介

村山 孝道 (Taka)

勤務先：京都文教大学教務課係長
勤続年：Since1996(開学時より、17年。)
経歴：教務課 → 学長秘書 → 教務課
委員会：教授会、教学会議、人事委員会
教務委員会、産業メンタルヘルス研究所
宗教委員会、研究科委員会、大学院委員会、FD委員会、FSDプロジェクト 他

FD研修会
The 18th FD Forum
2013年2月23日(土) 立命館大学
学生が主体的に学ぶ力を身につけるには
シンポジウム②「学生とともにすすめるFD」

FD研修会 一昨日日木野先生にお越しいただき本学初の教職学習会を開催。なんと一回生が教員研修の講師をしました。

FDフォーラム
「学生が主体的に学ぶ力を身につける」とても難しいテーマですが、なんらかのヒントを提供できれば幸いです。頑張ります！

2012年度
第18回FDフォーラム
学生が主体的に学ぶ力を身につけるには
2013年2月23日(土)・24日(日) 会場：立命館大学学生キャンパス

主催：京都文教大学
後援：文部科学省・京都府・京都市

訂正

誤：専門領域
正：関心領域

・ファシリテーション
・リーダーシップ
・プロジェクト・マネジメント
・大学職員“道”
・中小大学論
・学生FD活動を通じたSDの促進「FSD型戦略的OUT」

シンポジスト
本郷 隆夫
堀村 雅夫
村山 孝道
山内 秀子

ホーム @つながり #発見する 人

ツイート
フォロー
フォロー
お気に入り
リスト

中村 侑貴 (オガ)
@oga_nakamura
京都文教大学 臨床心理学部臨床心理学科3回生
中村 侑貴 (オガ)
・大学生自治会会長(2011年度～)
・FSDプロジェクト代表(2012年度～)
・経営学(リーダーシップ・マネジメント・モチベーション)

京都文教大学 平岡副学長

はじめに

・時間が限られておりますので
本学ならではの特徴のみに絞って発表します。

・詳細な活動の経緯・概要・活動内容については予稿集に記載しておりますので、そちらをご確認ください。

・資料はございませんので、目をスクリーンに。耳を私たちにお貸しください。

臨床心理学部

臨床心理学科 / 教育福祉心理学科

- こども・青年コース
- 生命・医療コース
- ユング心理学コース
- 対人・社会コース
- 心理学総合コース
- こども教育心理専攻 (小学校教員養成)
- 保育福祉心理専攻 (保育士・精神保健福祉士養成課程)

総合社会学部

- 経済・経営コース
- メディア・社会心理コース
- 公共政策コース
- 観光地域デザインコース
- 国際・日本文化コース

文化人類学研究科 / 臨床心理学研究

・2学部3学科2研究科 約2000人

・同じキャンパスに短期大学 約1000人

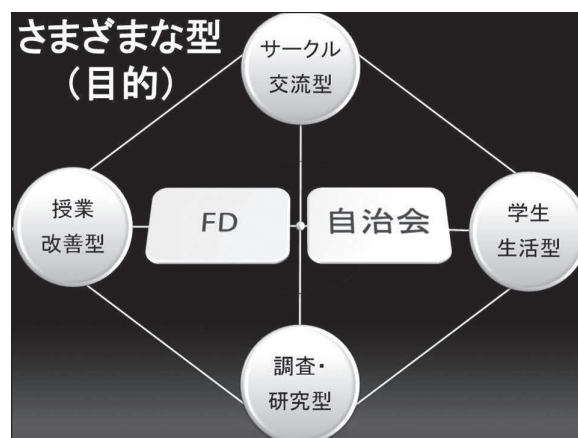
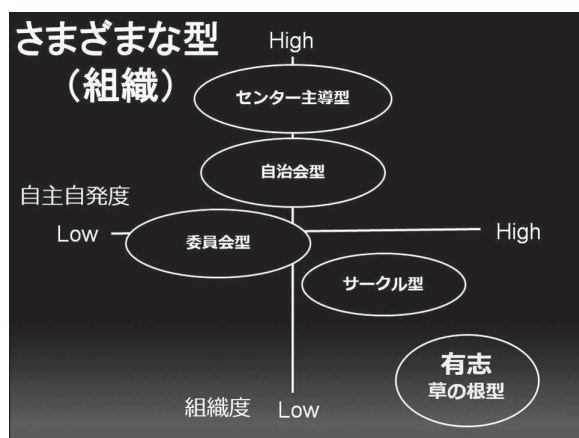
計3000人

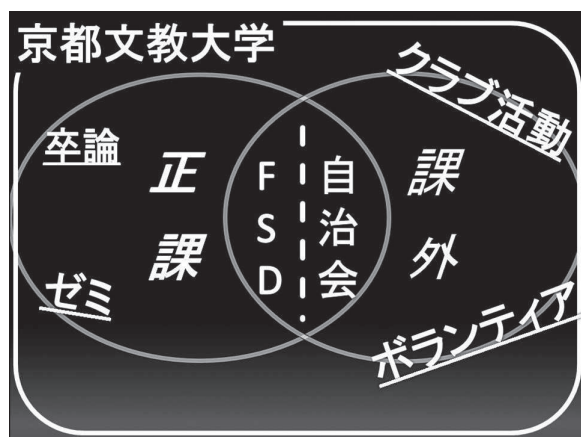
・社会貢献度ランキング総合39位、近畿の**私立2位**
(「日経グローバル」2010)。

・新聞への掲載件数**373件**(2010)。



どこか違う？FSDプロジェクト!



活動概要



FSDプロジェクトの目的

小規模大学である強みを生かして
学生が京都文教大学を
一緒に学費以上に使い切る。

キャッチフレーズ

「京都文教大学を元気に」
「京都文教を学費以上に使い切る」
「フェスタ感」

取り組み概要



- ① 「京都文教入門」系
- ② 他大学等訪問・他流試合系
- ③ 国際交流 × FD系
- ④ インプット系
- ⑤ もの書き系
- ⑥ その他

- ・FSDBooklet(マガジン)
- ・他大学訪問・交流
 - ・学生FDサミット
 - ・大学教育学会
- ・大学研究フォーラム
 - ・FDフォーラム
 - ・学内しゃべり場
 - ・学内研修活動

(コミュニケーション:ファシリテーション:広報:ゲーミフィケーション:プレゼンテーション)

イベントだけじゃない
様々なインプット

他者との関係性を構築する力	チームビルディング、コミュニケーション、ファシリテーションなど
組織を動かす力	プロジェクトマネジメント、リーダーシップなど
しっかりと伝えきる力	広報、プレゼンテーション、司会など
新たな価値を創造する力	イベントプランニング(企画)、ゲーミフィケーションなど

ン:司会力:PCスキル:etc)

- ・自己の探求・チームビルディング(自己啓発プログラム)
 - ・学生FDのWA主催(ファシリテーション・広報・ゲーミフィケーション)
 - ・リーダーズキャンプ
 - ・学内教職員FD講習
- ・プロジェクト・マネジメント
- ・リーダーズカンファレンス
- ・京都文教入門(自校教育)

2012年度
第18回
学生が主体的につけるには

フォーラム

2
6
2

こんな経験ありませんか？

入学後間もない1回生に対して。。



- 学生時代に何かをやり遂げてください
- 就職の時に必ず聞かれますよ
- 後で困りますよ

3年後...



ほら言ったとおりでしょ

あのとき私の言ったとおりにしていれば良かったのに...

今更遅い。自業自得！

「主体的に学ぶ力」

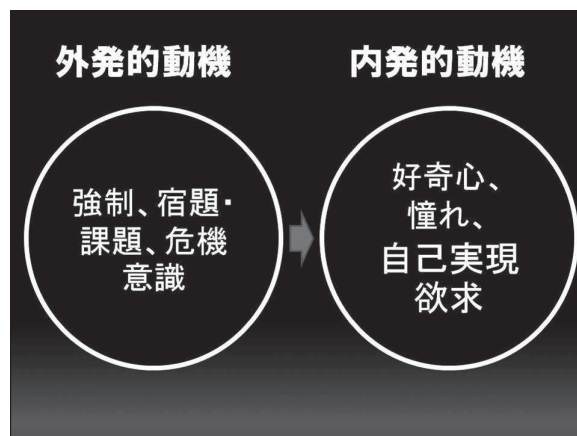
をつけるチャンスを大学が与えきれなかった、ともいえる



「その気」にさせることができなかった

どうしていれば良かったのか

- 宿題を増やす？
- 強制的に勉強させる？
- 説得する？
- 懇願する（笑）



「京都文教入門」での取り組み
～主体的に学ぶという内発的動機付け～

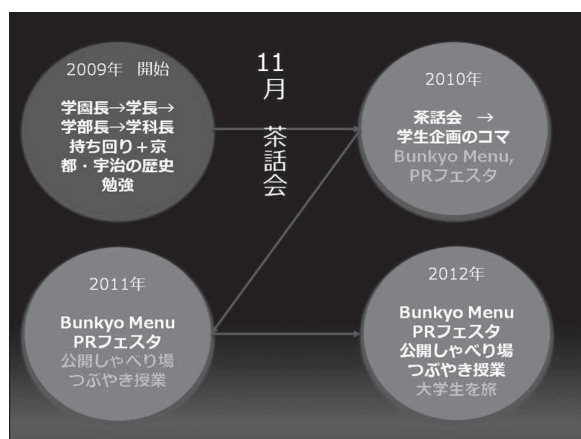
「生徒から学生へ」

- ・ 初年次必修
- ・ 大講義(220人～500人)

2009年のシラバス

- | | |
|---------|--------------|
| 1. 学園長 | 8. 京都宇治の歴史① |
| 2. 学長 | 9. 京都宇治の歴史② |
| 3. 学部長A | 10. 京都宇治の歴史③ |
| 4. 学部長B | 11. 京都宇治の歴史④ |
| 5. 学科長A | 12. 京都宇治の歴史⑤ |
| 6. 学科長B | 13. 京都宇治の歴史⑥ |
| 7. 学科長C | 14. 京都宇治の歴史⑦ |

「仏像作って魂入れず・・・」



基本戦略

Step1

- ・ 選択肢の提示・・・

Bunkyo
Menu

Step2

- ・ 証拠の提示・・・

プロジェクト
PRフェスタ

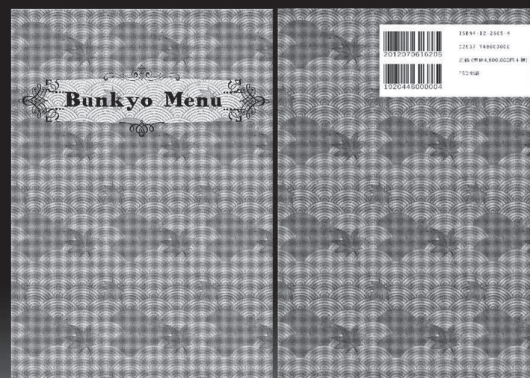
学生「先生、何書いたらいいですか？」

先生「何って君、どんなことをやってきたの？」

学生「いや特に。ただ一度いったボランティアは思
い出に残ってます。」

先生「へえ、ボランティアセンターには行った？」

学生「そんなのあったんですか！！もっと早く教え
てくださいよ！！」



[illegible]

- 一、 京都文教と、京都文教のある京都・宇治の歴史を紹介する。
- 一、 「生徒」と「学生」の違いについて理解してもらい、有意義な学生生活を送る心構えをしてもらう。
- 一、 京都文教ライフをエンジョイしてもらうために、「学費以上に京都文教を使い切る」ための知識と情報を与える。

- 一、教員・職員・学生の有志プロジェクト（FSDプロジェクト）が学生目線で授業の内容を考え、運営をしている。
- 一、「つぶやき授業」「プロジェクトPRフェスタ」「公開しゃべり場」など、他大学には絶対に無い、オリジナルの授業がある。
- 一、「フェスタ感」をキーワードに、提供する側も受講する側も楽しみ、そして学びたい。

新入生必修講義科目として、2009年度に開講。それ以降毎年、受講生や先輩学生が「しゃべり場」を開き、学生らしいしがらみの無い自由な発想でカリキュラムや講義内容が進化し、毎年成長し続けている『日本中探しても本学にしかない』完全オリジナル授業となっている。

- 京都文教の「モノ」や「コト」をメニューにまとめる
- それを教材にして授業を実施
- 例えば補助金30万円のプロジェクトの申請方法
etc...

Step1 Menuを作る

Step2 証拠を見せる

- Menuを活用して「学費以上に京都文教を使っている」上級生による大プレゼン大会。
- 京都文教Lifeを楽しんでいる生き証人が登場

プロジェクトPRフェスタ





コメントカードの感想

- ・「全然知らなかった。いい大学ですね。」
- ・「この大学を少し好きになった」
- ・「先輩のような大学生活を送りたい」
- ・「今のままじゃだめだと焦った」
- ・「京都文教を誇りに思う」

1. 先輩学生の姿

2. 内発的動機(好奇心、あこがれ)

3. 「主体的に学びはじめる」

きっかけを得る

その他 15コマ中8コマを企画

携帯解禁・私語厳禁、しゃべるな・つぶやけ
「つぶやき授業」 ※明日のポスターセッション

500人50グループ90分1本勝負
「公開しゃべり場」

「自己の探求」(LV社 2013年 計画中)

2012年度 第18回FDフォーラム

学生が主体的に学ぶ力を身につけるには

まとめ

結論1 「強要よりも好奇心を」

2:6:2の「6」には外発的動機付けよりも「内発的動機付け」

(好奇心、あこがれなど) が必要

上級生の姿(生きた証拠)が効果的

そして下級生に働きかける時何より上級生自身が主体的学習者になってゆく

学生FDの学生は他者のロールモデル

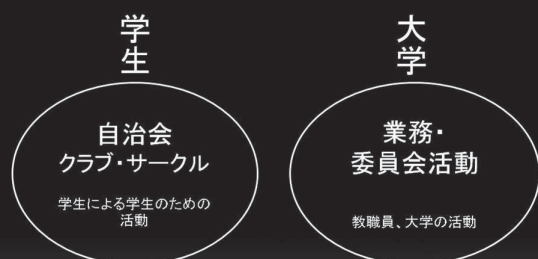
結論2 「試合」「本番」が必要

知識は持っているだけでは意味がない。活用と実践が大切。

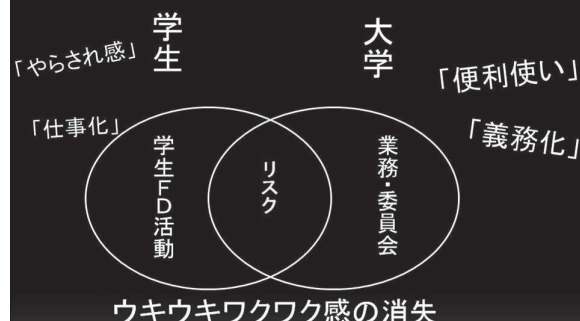
「試合」「本番」があるからこそ練習(学習)に身が入り、主体的に学習をする。

学生FDの活動の場は大きく華やかな「試合」「本番」がたくさんある

課題1 学生主体？大学主体？

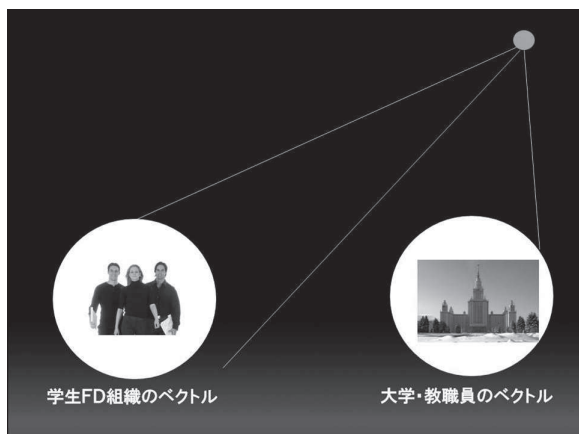


学生の活動と大学の活動はそれぞれ成立



ウキウキワクワク感の消失

学生FD活動は学生の活動と大学の活動の重なりが大きい
そのため、学生主体と言いながら大学が主導しがちになる。



大学(教職員に必要な視点)

学生FDは学生のみが主体の活動ではない
しかし教職員のみが主体の活動でもない



教職学主体へ

課題2 「〇〇してあげているのに」

- 自分にひきつけられれば「のに」は生まれない
- 自分の成長に直結させる

- ゼミや卒論など学業に良い影響を
- 活動の中で得た経験、技術、挫折、達成感は就職活動に良い影響
- 培ったコミュニケーションやコーディネート知識は将来家庭で役立ち

- リーダーシップは将来子育てや地域での活動に生き
- 学び、成長し、改善し、スパイラルアップしていく(Development)ノウハウを学ぶことは人生そのものを豊かにする。

それが学生FD活動である、と思っている

俺のために

人のためになることをする

自利即利他

菩薩

ご清聴、ありがとうございました。

2013年2月23日(土)
於:立命館大学

京都文教大学
職員 村山孝道
学生 中村侑貴

1円にも、1単位にもならない。

にもかかわらずなぜ？

私の思い

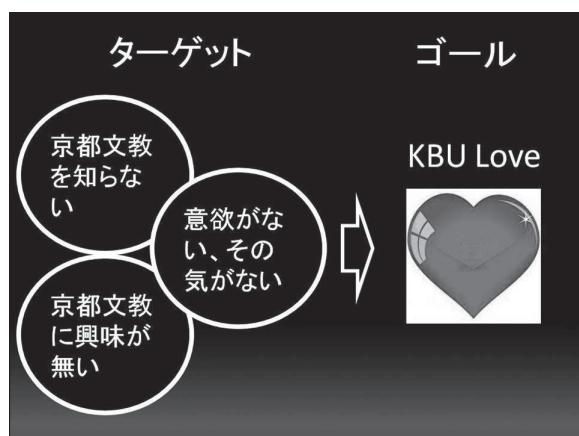
- ・教職員がやるべきことを学生に？
- ・実はこの活動で一番得をしているのは？

- 500人を前に、司会やプレゼン。最高の「本番」、「試合」の場。
- 学生FDIには最高の場がある。だから伸びる。



自己の成長
未知の自分への好奇心

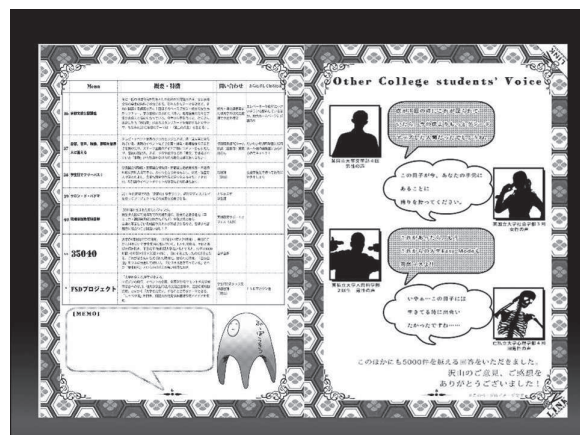
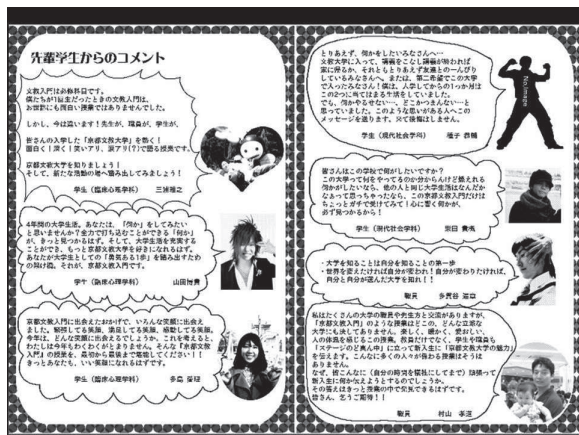
「無本位」入学



学生FD組織のベクトルに沿わないことを第三者(大学)が強要しないこと

学生FD組織のベクトルと個人のベクトルが合っているのは当然。

その上で、大学と学生FD組織と個人すべてにメリットがあるWin Winであること



- 500人を前に、司会やプレゼン。
- 「本番」「試合」の場。

- ・「試合」のない練習では身につかない。
- ・「試合」の場合は華やかでハードルが高いほうが良い

教員

- ・ 放っておけない、待ちきれない
- ・ 「そうじゃない」「それじゃだめだ」
- ・ 失敗はゆるされない

学生

- 自由にできない
- 楽しいけど、なんだか操られているような
- レールが敷かれているみたい

K59 京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

Keep Innovating.

燦

京都産業大学
学生FDスタッフ「燦」
～活動紹介～

2013年2月23日(土)
第18回FDフォーラム

KYOTO SANGYO UNIV. **燦**

K59 京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

Keep Innovating.

**学生FDスタッフ
(愛称:「燦(SAN)」)**

- 2011年6月に結成。
- 現在、45名の学生が活動している。



K59 京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

Keep Innovating.

活動理念

「アホなことを真剣に、
マジメなことを楽しく。」

K59 京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

Keep Innovating.

活動目的

各大学での取組内容、FD活動における学生の役割を知り、本学では何ができるか、何をすべきかについて、燦で議論を重ねた。

↓

——授業を対象とした狭義のFD——

燦が目指すのは、
**学生・教員・職員が協力し、よりよい大学
を創っていくという広義のFD**

K59 京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

Keep Innovating.

**Academe Co-Creation
「大学共創」**

というスローガン

K59 京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

Keep Innovating.

燦
SAN

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

愛称の「燦」ってどういう意味？

- ・ 鮮やかに輝くさま。美しくらびやかなさま。
- ・ 例) 太陽の光が燦々と降り注ぐ。

**「京都産大で燦々と輝き続ける
団体でありたい、
京都産大がより明るく光り輝く
大学になってほしい。」**

という2つの願いが込められています。

Keep Innovating.

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

主な活動内容

- ① 学内における「大学共創」の場と機会の提供
- ② ①で出された議論内容の集計・分析
（「共創データブック」の発行）
- ③ 分析結果の学内外への発信
（学会や学生FDサミットでの発表、
学術誌への投稿）

を中心に活動。

Keep Innovating.

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

『京産共創』プロジェクトとは？

「大学共創」

を実現するための根幹となるプロジェクト。

今後、数年にわたって継続して取り組んでいく
予定である。

Keep Innovating.

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

『京産共創』プロジェクトの意義

- ・ 普段じっくり話し合う機会が少ない
学生・教員・職員の三者が、
立場を超えて意見交流ができる場である。
- ・ より良い大学を、学生と教職員が共に協力し、
創造していく契機となる。
- ・ 「燦」の今後の活動を検討する材料にする。

Keep Innovating.

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

2011
12/9

『京産共創』 プロジェクトⅠ



Keep Innovating.

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

燦 presents『京産共創』プロジェクトⅠ

記念すべき京産共創プロジェクトの第1回目であり、104名の学生、教員、職員が参加。

- ・ 京都産業大学について語り合う「しゃべり場」を実施。
- ・ 共創風土を醸成するきっかけを得ることができた。

➡ 開催成果をプロジェクトⅡへ引き継ぎ

Keep Innovating.



K⁹⁹ 京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

燦 presents『京産共創』プロジェクトⅡ

第1弾で出された意見を反映し、より焦点を絞った深みのある議論を目指した第2弾のイベントであり、89名の学生、教員、職員が参加。

テーマ

- ①元気な学生が多い原動力は？
- ②ワンキャンパスを活かすためには？
- ③好きな授業、人に勧めたい授業とは？

本イベントの実施により、大学の活性化に繋がるような、具体的かつユニークなアイデアを数多く収集することができた。

Keep Innovating.



K⁹⁹ 京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

燦結成一周年記念イベント

「京都産業大学にとって白熱教室とは？」

- ・ハーバード大学 マイケル・サンデル教授の「白熱教室」を題材に、京都産業大学の授業について、学生・教員・職員が立場を越えて意見交換。
- ・96名の学生、教員、職員が参加。
- ・開催成果を「日本リメディアル教育学会 第8回全国大会」にて発表。

Keep Innovating.

K⁹⁹ 京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

「京都産業大学にとって白熱教室とは？」

- ・学生の主体的な学びをどう促すか？
- ・双方向型授業の利点とは、何なのか？



本イベントを通して、マイケル・サンデル型授業には、学生、教員共に入念な事前準備・学習が必要不可欠であることの認識、および学生、教員がそれぞれ意識すべきことが明らかになった。

Keep Innovating.

K⁹⁹ 京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

京都産業大学 学生FD活動の特色

Keep Innovating.

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

ファシリテーション能力の育成

Keep Innovating.

- 本学のキャリア教育研究開発センター「F工房」と協力し、燦メンバーのファシリテーション能力の向上に努めている。
- 合宿や研修会、模擬しゃべり場を繰り返し、立場が異なる参加者間の議論が、円滑に進むよう努力している。

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

ただのイベント屋ではない ～実施後の「振り返り」の重要性～

Keep Innovating.

データブック

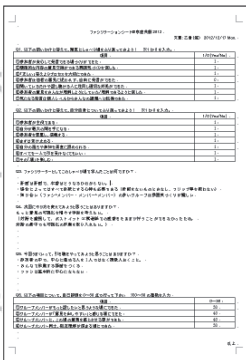
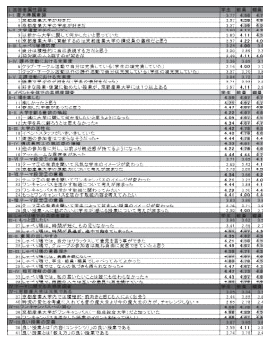
燦は、イベントの実施・企画のみならず、振り返りに多大な時間と労力をかけています。




京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

ファシリテーションシート 共創シート

Keep Innovating.

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

燦は...

Keep Innovating.

イベントの企画・運営、実施後の振り返り、データ分析、成果物の作成・発表に至るまで、全てを学生が中心となって取り組んでいる。

京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

「大学共創」の輪を拡げる ～燦の認知度向上のための試行的取組～

Keep Innovating.

学内外での「燦」の存在や「学生FD」の認知度向上のためさまざまな広報活動に取り組んできた。

- マスコットキャラクター「SUNちゃん」
- twitter、YouTubeの活用
- 学生FDサミットへの参加学生の公募



京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

オリジナルマスコットキャラクター 「SUNちゃん」の誕生

Keep Innovating.

～プロフィール～

身長：33cm
体重：3.3kg
誕生日：6月27日
性格：照れ屋、ちょいドジ
好きな食べ物：みつばちの野菜ラーメン
生息地：セラテスの窓際、センター長室の本棚の上
将来の目標：名ファシリテーターになる。南さんを倒す。

「学生FD＝堅苦しい」というイメージの払しょく





K50 京都産業大学
KYOTO SANJO UNIVERSITY

今後の展望

現時点までは

- ・「場と機会」をイベントとして企画することで提供してきた。

これからは

- ・イベントの成果をフィードバックして目に見える形に
- ・小規模の学部別FD等を行っていく
- ・参画したいとおもえるような仕掛けづくり

これらを実現できるように、努力していきたい。

